[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

12
'97春夏号

特集

自然のなかでたくましく、のびやかに！
山村留学のすすめ

De POLA NO.12

でぽら●もくじ

特集 自然のなかでたくましく、のびやかに！
山村留学のすすめ

いじめ、非行化、体力の低下等、教育環境の悪化する都市部を脱出して、豊かな自然や農家の人々とのふれあいの中で学ぶ「山村留学」が定着してきている。子供の減少で悩む地方も大歓迎。学生や社会人のケースも含めて、各地の〝山村留学〟を取材した。

子供たちの声で島が明るい
瀬戸内シーサイド留学
野忽那島――3

●でぽらエッセイ
本ものの自然にふれて子供は変わる（汐見稔幸）――24

■夏休みを利用して多彩な自然体験
・サバイバル、座禅、農家体験/「育てる村」自然教室――6
・売木は第二のふるさと/14年目を迎えた山村留学――8
■川遊び、畑仕事、鶏の世話/山のふるさと合宿「かじかの里学園」――10
毎年25名前後が留学。地域の郷土芸能も復活（広田村山村留学センター）――12
■宮崎県立五ケ瀬中・高校でフォレストピア授業を見学――16
■［北の大地］へ自然体験留学
・親子で学ぶ秘境のユートピア郷（富村牛小中学校）――19
・10年目を迎えた「自然体験留学」、形態も多様化して家族留学も（瓜幕小学校）――21
・神戸から憧れの北海道へ　波田さん一家の「家族移住」――23

山村フィールドワールド
「大地に夢」を托して
社会人・学生の山村フィールドワーク――27
①大工の体験をしてみませんか――28
「付知峡ひのきの家」体験セミナー
②森のログハウスで語り合おう――30
田舎と都会の交流拠点「語らいの里・噺野」
③北海道で酪農・農業を――32
「レディース・ファーム・スクール」で学ぶ女性たち

■農作業を通じて自然と共生しよう――35
「まほろばの里」で学生がフィールドワーク（山形県高畠町）

山村留学生募集中の市町村
●北海道へ自然体験留学●木造校舎が楽しい我が家「四季の子ども村」●大和・紀州の歴史ある山里で●高知県が高校生募集●㈶「育てる会」の山村留学他――13
■全国の山村留学事業実施市町村――39

●地方で技術を身につける/社会人・学生のための山村留学――34

でぽらとは

「でぽら」（DePOLA）とはDepopulated Local Authorities（人口が少ない地域）、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『でぽら』をお届けいたします。

[表紙写真]
㊦野忽那島（愛媛県中島町）にシーサイド留学。左から今井君、小島君、酒井君。
㊤長野県八坂村、夏休み「農家体験」に参加した子供たち。（写真／小林恵）

子供たちの声で島が明るい

瀬戸内シーサイド留学・野忽那（のぐつな）島（愛媛県中島町）

児童の半数以上が留学生

四国・高浜港から町営高速艇で約30分で瀬戸内海に浮かぶ野忽那島に着く。中島町6つの有人島のうち最も小さい島で、面積約1㎢、約280人が漁業と農業（みかん）で暮している。

「シーサイド留学」の野忽那小学校は桟橋と道路をはさんで目と鼻の先にある。目の前は青い海、裏手には標高73mの皿山がある。

平成8年現在、児童数は14名。うち地元は6名で、8名が山村留学生。1年生は1名、3年、4年生が3名、5年生が3名、6年生が7名。昭和61年以降は2学級複式だったが、留学生が来島して4学級複式になった。今年4月にはピカピカの新1年生も留学する。

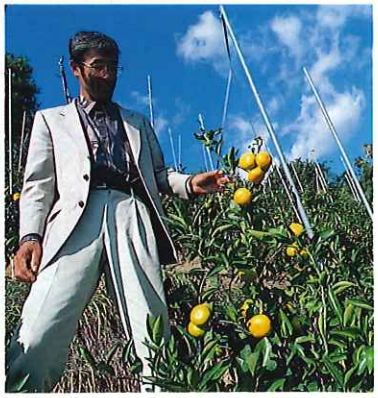
シーサイド留学実行委員長・内藤久司さん（49歳）に島内を案内してもらった。

島の南斜面はみかん畑。瀬戸内の陽光をたっぷり浴びた完熟みかんは日本一と称される「中島みかん」だが、胸ほどの高さの木がやっと実をつけている。5年前の台風19号の直撃ではほとんどのみかんが壊滅。新たに植樹したが、収穫できるまでに10年以上かかるため、それを機に辞めた人もいる。

内藤さんは、ネーブル、伊予かん、レモンも栽培するみかん農家で町会議員。昭和63年度より発足した「瀬戸内シーサイド留学」の一番最初の里親でもある。

青い海と白い砂浜、新鮮な魚とみかんの島、野忽那島。この恵まれた自然とのびのびとした環境の中で、子供たちが、個性をのばし人間性豊かに育ってほしいと地区民の総意により里親制度を設けた。子供への愛情と教育に熱

▶野忽那港。下船すると右手に野忽那小学校



▶内藤さんのみかん畑。苗木はまだ小さい。

いきいき〝28の瞳〟

子供たちの帰宅を犬たちも待っている。

意のある里親の元で、留学してきた子供たちは家族の一員として一年間（希望者は数年間）島で暮らす。

昭和30年には224人いた児童も、若者たちの離島で年々減っていき、昭和60年には7人になった。シーサイド留学の導入は過疎化に悩む島民にとっても願ってもない制度で、島に活気が戻り、学級存続の危機も免れた。

昭和63年に第一期生8名が留学してきて以来、毎年8～10名がコンスタントに留学、卒業後も島行事等に訪れる卒業生が多く、第二の故郷といった感じになっている。

我が子のつもりで

里親・前田一豊さんは、みかん農家だったが台風19号の被害を機に転職、現在漁協に勤務している。3年前にある里親から引き継いで里親になった。小学校3年、1年、幼稚園の3人の子供、それに留学生2人、5人のお父さんである。

「他人という意識はなく、自分の子供の一人として普通の生活を心がけています。最初に受け入れた子供から進学の悩みを電話で相談された時は、里親になってしみじみ良かったと思いました」

その子は、いま北の大地・北海道に山村留学しているそうだ。

「留学が子供たちにどうだったかは、時間がたってから何時か湧き出してくるものでしょう。大きい器の子供になって満ち足りた気持で島を卒業していると思っています」と前田さんは語る。

作間家住さん（69歳）、一子さん（67歳）夫婦は里親の中ではキャリアも長く最高齢者。

「出会いは私の宝です。子供の声が聞こえると島が明るいんですね」と里親大歓迎。しかし子供たちの病気やケガには神経を使う。島には医者がいないので、いざという時は松山へ行かなければならない。

一子さんは「私、躾は厳しいんです。子供が宿題ができていないと教員宿舎に電話して教えてもらいに行かせるんです」

「一学期は子供も緊張しているが、夏休みも終る頃になると我がままもでてくる。でも地元の子供や先生とのコミュニケーションもよくなり、里親との関係もええようになります」

運動会や学芸会には親、兄弟が来島してにぎやかになる。家族は中島本島や野忽那小の体育館に泊まり、休息しながら交流を深める。

「夏休みには、卒業した留学生が田舎へ帰ってくる感じで遊びに来て、長い子は10日位泊まっていきますよ」と夫婦は嬉しそうに語る。

留学生は大阪、京都、兵庫、佐賀、広島、松山、遠くは石川、沖縄からも来ている。

里親・田村善蔵さん（61歳）は初代実行委員長。子供を育て終え奥さんと

▲里親・前田さん宅。5人は本当の兄弟のように仲良し。
▼作間さん宅。左は沖縄からきた糸数君。

二人になった頃シーサイド留学がはじまった。

「里親をするようになって生活がきちんとしてきました。食事も子供がいないといい加減になりがちですが、生活が子供のリズムになり、話題が増えますよ」

みかん栽培、PTAと忙しいが充実している。みかんが熟れると毎年卒業していった里子に送ってやるという。

留学の子供の部屋を見せてくれた。「片付けろといくら言ってもなかなか片付けん」と言いながらも、その表情は可愛くてたまらない、といった感じ。

里子の吉村せりかさん（4年生・松山から）は「野忽那は絶対にいい。学校や友だち、行事も大好き」と言う。

秋山佳代さん（6年生・京都から）は、農作業やみかん畑の仕事が好きで、よく手伝う。

日曜日の午後、佳代さんと地元の子・中西佐代美さん（小6）は堤防に寝そべってお喋り。中西さんは来年の春休みには京都の秋山さん宅に遊びにいく約束をした。

今後はセンター方式の検討も

「へき地教育は教育の原点だと思います」と明賀壽雄校長は言う。

「島の子と留学の子が交流することで、島の子らにも活力が出てきて、表現力も豊かになります」

島ならではのユニークな授業は、5月の天草採り、夏の魚の目刺し干し、秋のところてん作りなど。カヌーや釣り大会などの楽しい特別授業もある。

給食には、わかめご飯、ひじきめし、ところてんデザート、みかん類など、島の味が並ぶ。だから肥満気味の留学生も、大抵スリムで健康体になる。

子供にも親にも好評なシーサイド留学だが、今後に問題がないわけではない。それは、里親たちの高齢化で、新たな里親を探すのが困難になっていることである。

そのため、シーサイド留学の灯を絶やさないようセンター方式を検討していると明賀校長は語っていた。

●問い合わせ／瀬戸内シーサイド留学実行委員会（野忽那小学校内）

☎089（998）0330

たった一人の1年生と先生。

海の幸いっぱいのおいしい給食。

道ばた、軒下、至るところが遊び場

▼夕暮れの港。犬と散歩するのが子供たちの日課。

夏休みを利用して多彩な自然体験

▲キャンプしながら村内をひたすら歩くサバイバル体験班

都市化社会の青少年が親元を離れ、自然の豊かな農山漁村に転住し、地元の学校に通いながらさまざまな自然体験や自立的生活を積むという山村留学制度は、㈶育てる会（青木孝安理事長）が昭和44年に八坂村で第一回自然教室を開催したのがはじまり。

夏休み、冬休み等に実施する「短期自然体験活動」は、山村留学とは何かや山村留学を希望する子供達にとって大切な実習の場となる。中には夏休みの自然体験教室だけに毎年参加する子供達もいる。

山村留学制度を最も早く取り入れた長野県北部の八坂村と南信の売木村を訪ねてみた。

サバイバル、座禅、農家体験——［育てる村］自然教室（長野県八坂村）

安曇野の北東、大町市に接する八坂村は山また山、平坦地の少ない山合いに集落が分散する。高原の条件を活かしたキャベツ、大根、蕎麦などの栽培や、稲作の兼業農家が多い。

この八坂村で「育てる会」の「育てる村第一回自然教室」が開かれたのは昭和44年の夏、一軒の空き家の農家を借りて始められた。長年、教職にあった青木孝安さん（育てる会理事長）が教育は学校で教わるだけでなく体験による人格形成が必要といくつかの候補地から、四季の山村体験に最適地と決めたのが八坂村だった。

昭和50年に水田と山波を望む高台に、野外活動センター「やまなみ山荘」（八坂学園）を開設、ここを拠点に農家、地元の学校と関係を持ちながら活動が行なわれ、東京・京阪神方面から毎年1000人前後の子供たちが参加している。

夏の自然体験活動も明日で終わりという日、八坂学園を訪ねた。活動別に班がいくつかあり、それぞれの活動に出はらっていた。サバイバル体験、座禅体験、木崎湖で水泳、キャンプ、農家体験、水車小屋（水車のそばの移築された300年まえの農家）で宿題中、と多彩な活動。

サバイバル体験は小5年から高1年の男女10名。リーダーと廃集落や神社の境内でキャンプしながら「八坂を歩こう」をテーマにひたすら村内探検。最後のキャンプを撤収して個人装備のザックを背負う。炎天下の学園への帰り道はかなりきついが、皆それぞれのペースで歩きはじめた。

千葉から参加した郡司君（11）は大鍋を抱えて歩きながら一言「ツカレタ」と感想。大阪から参加の荻野君（13）も「しんどい」。よかったことはの質問に「夜のテントが楽しかった」と疲れた顔が笑う。リーダーの佐藤友紀さん（27）に子どもたちが夜何していたか聞くと、「私たち別のテントですからわからないです、何してたのでしょうね」

▲勝野さん宅で農家体験

▲仁科さん宅で農家体験（左はOBリーダー大野さん）

▲お土産用にじゃがいも掘り（勝野さんの畑）

地質調査の仕事をしているという佐藤さんは中学2年から「育てる村」の参加者、それ以来高校生でサブリーダーとなり大学時代も毎年八坂村にきている。

農家の仁科克彦さん（60）宅では竹細工の最中。危なっかしそうに小刀やキリを使う子供たち。お父さんの仁科さんとリーダーの大野さんが補助をする。仁科さんは第2回目から子供たちの受け入れを続けているが、途中5年ほど休んだ。仁科さんの子供たちが小学校の中級になった頃同年齢の子供たちとの扱いが難しくなった時だった。それ以外は〝行事の子〟（短期体験の子らを地元ではこう呼んでいる）を受け入れ、山村留学の里親も続けている。「お世話した子どもが突然訪ねてくれたり、結婚式に招待してくれたりした時、里親をやっていてよかったと思う」と語る。

初めてリーダー参加した大野さんは今年高校の教師になったばかりだが、八坂村は二度目、小学校5年の夏、山村生活に参加したことがある。「いま思えばあの体験は大きな財産になっています。農村には生活のすべての関係が目に見えてあることです。参加を勧めてくれた親に感謝しています」

農家体験の子どもを受け入れている勝野ヒデ子さん（55）宅では涼しくなった夕方、子どもたちを農作業に連れていった。作業といっても〝じゃがいも〟掘り。「2、3株も掘れば土産になるやろ」と畑で掘り方を教える。「おー、宝ダー」と次々と土の中から出てくる薯に感激する子供たち。踏んでしまいそうな数センチの芽を指さして「大きくなったら人参になるんだよ」と勝野さんが畑の野菜を説明し、夕食用の野菜を収穫して家路につく。

地域との交流は里親の関係だけでなく、活動センターの企画で2月の庚申祭り、11月の収穫祭があり、地元の人たちを招いて催されているが、平成7年から「町とふるさと交流会」が行なわれている。これは八坂村の子どもたちにも活動センターの活動に参加してもらおうと村の教育委員会の協賛企画で呼びかけて実行している。

二回目の今年も、夏休みに東京でホームステイ、諏訪湖でヨット・カヌー体験、松之山町で豪雪体験、活動センターでの野沢菜漬等、八坂学園や育てる会の施設を基地に7回のプログラムで村の子どもたちと町の子どもたちの体験交流が行われている。

文・写真／小林恵

▼最後の夜は八坂学園の庭でバーベキュー。準備をする子供たち。

売木は第二のふるさと
14年目を迎えた山村留学
（長野県売木村）

売木小学校・中学校

長野県南端の丘陵地帯にある自然郷・売木村。愛知県境の茶臼山山麓に広がる標高1000～1300mの山並みに囲まれ、売木川、軒川等の美しい渓流がある。

㈶育てる会が村の協力を得て、昭和58年に売木学園を開設。平成7年に村が景色のいい丘の上に山村留学センター「売木学園」を建設し、運営は育てる会が担いながら、14年間にわたって留学生を受け入れてきている。

夏休みの自然体験教室は売木学園を宿舎に5回実施され、延230人が参加した。

▲はじめて家族と離れて参加した子供たち

原教育長の畑でトウモロコシのもぎ取り

自分で獲ったトウモロコシをお土産に

2泊3日の夏休み教室には20名の子供達が参加していた。親と離れるのも、山村へ来るのも初めてという小学校低学年生が多い教室なので、指導やお世話に当たる人だけで約10人。

「育てる会」東京・大阪本部からベテランが引率してくるほか、教育学を専攻する女子大生や山村留学の経験を持つOBたちもボランティアで手伝いにきている。

最初の夜にはメソメソ泣き出す男の子もいたが、3日目にもなるとみなケロリ。朝食後センターの廊下や庭を走りまわって大はしゃぎしている。女の子達は「○○ちゃんとは大の友達になったから、手紙を書いたり会ったりするの」と気に入った仲間と手をつないだりしている。

「もう3年もきているよ」という小学4年の男の子は帰宅前の荷物の整理も早々とすませ、マイペースでマンガ本を読んでいる。

昼に帰路につくバスに乗るまで、近くに住む原光秋教育長のトウモロコシ畑でもぎ取りをさせてもらうことになった。原さんは里親にもなっており、その日も長期留学をしている男の子が、得意気に犬の散歩をさせていた。

売木の高原トウモロコシは伊那地方で最も高価なブランド品。その畑に入っていって、子供たちは大喜びで何本かずつもぎ取った。

「ここのモロコシは高原の太陽と朝夕の冷たい空気の中で育つのでとても甘くておいしいよ。お家へ帰ってお父さんお母さんに食べさせてあげてください」

トウモロコシはセンターの前で職員が一人三、四本ずつをビニール袋に入れて子供達に渡した。

川遊び、キャンプファイヤー、山歩き、花摘みなどいろいろなことを体験した子供達は最後に泊っていた部屋の掃除をして、バスに乗り込んでいった。

この中の何人かが、いずれまた売木へ出かけてくることだろう。

「山村留学は、あくまでも子供自身が決めること。本人にその意志がないと成功しません。育てる会が一番力を入れているのはその点です」と大阪本部と各学園を年中まわっている山本指導員は語っていた。

月一回は里親の家へ

売木村山村留学センターには小学校1年生から中学2年生まで13人が留学中。出身地は静岡県が半分で、東京・神奈川から4人。兄弟でが3組いる。6人が留学2年目である。

人口900人、小中学校の児童生徒数59人の売木村にとって山村留学生の存在は大きい。

八坂学園から2年前にやってきた山田主任は「ここは村も大変理解してくれていい関係を保っています。卒業生やその父兄も売木を第二のふるさととして地区の人と交流を続け

りんご狩り教室

竹を取ってきて竹細工に挑戦（センター前で）

近くの川や沼で釣りを楽しむ留学生たち

ているケースが多いですね」

留学生は木の香のする新しいセンターで生活しているが、月一回一週間里親の家へ行って暮らす。現在6軒の農家が里親になっていて、子供たちはその日を楽しみにしている。

「普段センターではテレビやファミコンもダメですが、農家では家族の一員として暮らすのでテレビ位は見られます。農家の人々からいろいろ学び、少しは手伝いなどもします」

学生時代から教育問題に関心を持ってきた山田主任だが、最近は遊び方一つ知らない子供が多いことに驚くという。

「応募してくるのは、以前は不登校とか、学校になじめない、何らかの問題をかかえている子が多かったのですが、いまは自然環境の中でたくましく育てたいという教育熱心な親の意志が強い。それだけに、寮の食事は自然食にしてくれなどいろいろ注文を出してきます。

子供はというと、何をしていいかわからない、何もしないでダラダラしているというように遊び方を知らない。〝さあ、今日は川へ行くぞ〟と言っても、長靴をはかず、一張羅の皮靴などをはいて玄関へ出てくる子供もいます。タフな子供に育てる以前に、基本的なことから指導していく必要があります」

センターから学校までは徒歩約30分かかる。学校は下の方にあるので、中学生なら登校に走って15分、帰りはみんな寄り道しながらのんびり一時間かけて帰ってくる。

「この30分の通学距離がとてもいいんです。知らず知らずに足をきたえ丈夫な子供になっていきます」

地域の農家の協力で、田植え、稲刈り、りんごや柿採りなども体験しながら、子供たちは二まわりも三まわりも大きくなっていく。

留学生がインパクトになる

裏側に美しい雑木林のある陽だまりの中に近代的な売木小中学校があった。広いグラウンド、体育館など施設はすべて都市並み。校舎の中庭には、先生や子供達が育てた山野草が美しい花を咲かせ、玄関や廊下に置かれた盆栽仕立ての菊の花も先生と生徒達が丹精こめて育てたもの。

教室では一学年3、4人の児童が、熱心に楽しそうに勉強中。なかには「算数の時間だけど、今日は特別」といってカメや魚の棲む水槽を洗っているクラスもあった。

小野教頭先生にお話を伺った。

「地元の子供はのんびりおっとり型が多いので都市からきた子供がインパクトになり、いい意味で影響しあっています。運動会、文化祭など、一人ひとりが主役です。だからみんなすごく頑張って一生懸命やります。

山留の子は雨の日も嵐の日も30分歩いてやってきます。車の私が『乗せてやろうか』といっても『いい』と断ります。歩くのが楽しく平気な様子で、その意味でも田舎の子よりたくましく育っていますね。

6年生は9人のうち5人が山留の子で、ここが気にいって3年いる子がいます。昨年の夏は9人全員がその子供の浜松の家へ行き、海水浴を楽しんできました。そんな交流こそが山村留学の理想で、売木村はとてもいい関係ができていると思います」と語っていた。

（取材／浅井登美子）

稲刈りを体験。さすが疲れたが「とても楽しかった」（写真／売木学園・山田主任）

川遊び、畑仕事、鶏の世話――山のふるさと合宿

「かじかの里学園」（群馬県上野村）

▶春、校庭に桜が咲く頃、室名も決まり看板をつくる（4人1部屋）。下は1階リビングルームでのミーティング。
▼栖原地区の高台にあるかじかの里学園。左は体育館。

全山紅葉の山あいを利根川の支流・神流川がおだやかに流れ、その沿岸に家々が点在、山にも里にも赤く熟れた柿がたわわに実っている。唱歌〝里の秋〟を絵に描いたように美しい山村、上野村（人口約1700人）の晩秋である。

「かじかの里学園」は、そんな風景が一望できる栖原地区の高台にあった。

二階建てのロッジ風鉄筋コンクリートの建物で、広々としたグラウンド、体育館、畑もある。上野西小学校の廃校跡地にふるさと体験センターとして建設されたもので、5年前、山村留学センター「かじかの里学園」に衣がえした。

朝寝坊もOK、月一回〝完全自由日〟

訪れた日は平日だったが、ふりかえ休日で、しかも月一回の〝完全自由日〟。何時もなら朝6時には起床して校庭で「朝の集い」（子供達がリレー、缶けり、縄とびなど自分たちで考えた遊びをする）をし、朝食の準備や鶏の世話など、それぞれが当番の仕事をしてから朝食につくのだが、今日は起床時間も自由。朝食、昼食も自分の好きな献立で調理できる。

朝10時頃、3人の男の子が台所で朝食用の焼きそばを作っていた。野菜がたっぷり入り、玉子とコロッケも載っているジャンボでおいしそうな焼きそばである。使い終ったフライパンは湯を沸とうさせてきれいに洗い収納する。

「家では少し手伝ったこともあるけど、ちゃんと作るようになったのはここへきてはじめて。別にいやじゃないよ」と答えてくれたのは関根君（小学5年）。関根君の家では兄（小学6年）、弟（小学4年）の3兄弟で留学してきている。両親は千葉県の大洗町で漁業関係の仕事をしている。夏のサマースクールに参加したところ、かじかの里学園がすっかり気に入って、3人とも留学してしまった。

「ここは特に川遊びが楽しい。海ではあまり遊べないけど、川や山はいろんなことがいっぱいあるよ」と関根君は言う。

▼鶏小屋で、嘉藤さん（左）と山本さん。

▼子供たちの陶芸の腕前はなかなか。指導する小倉園長。

▼男の子3人が厨房で朝食の仕度

関根君の仲良しの友達、若林君は所沢市からきて2年目。二人の作った焼きそばをおいしそうに食べている野村君（小学4年）は長野県から留学してきた。一人っ子で最年少。「はじめは甘えん坊で、よく泣いたけれど、いまは当番もよくやるし、自立心もできて、とてもしっかりしてきましたよ」と小倉八重子園長があとで説明してくれた。

事務所へ行くと、早速女の子がお茶を入れてきてくれた。

「小倉さんは？」

「私もいただこうかしら」と小倉園長。

ここでは先生とか所長とかいう言葉は使わず、すべて〝さん〟付け。小倉さんは元教師で開設と同時に来村、子供達にとって頼もしいお母さんでもある。

女の子は小学6年生、嘉藤さん。前橋市近郊の町から今年4月にやってきた。

「私、向うでは登校拒否していたこともあるんです。父にここがいいよとすすめられて来たのだけれど、上野では学校へ行くのも楽しいし、いい友達もいるので気に入っています」

嘉藤さんは神経質な少女だったが、上野へ来て陽気でたくましくなり、やさしい気持ちでみんなによく協力する、と小倉先生は言う。

同室の仲良しの友達は千葉市出身の山本さん（中1）。

「お姉ちゃんについてきてここが気に入り入園したの。都会の学校より落着いてしっかり勉強もできるし、川遊びや野山で花や植物を採集するのがとても楽しい」

山本さんはツタでリースを作るのが大好きで、できれば村内にある「花いちもんめ工房」の松本さんの家に里親に行くか見習を続けていきたいと言う。

さすが女の子たち、自分の部屋をきれいに片付け、花や木の実などで飾っている。

両親も年10回は来園して

「かじかの里学園」には5人の職員がいて子供たちの生活指導や世話をしているが、子供達も4つの班に分かれて当番の仕事を担っている。食事係、外係（主として鶏の世話）、内係（風呂や屋内の掃除）、季節係（草むしりなど）など。

朝は6時に起床して園庭へ出て「朝の集い」。夜は夕食の前7時から30分間全員集まってミーティング。みんなで一日の出来事を語り合ったり意見を出し合う。山本さんは、

「中学生はとても忙しい。学校の部活もあるし園のこともある。学校の先生は、宿題をやってこない山留の生徒に『かじかの子は』ということがある。一人ひとり個人の問題だと思うのだけれど……。でも、だからみんなで頑張ろうという気持ちになる」という。

嘉藤さんは「ここへ来てはじめてシモヤケができた。最初は結構きつかったけれど、自分のことは自分でやるのは当り前というようになり、早起きも平気になった」

学園から小学校までは通学バスの送迎があり、バスで約20分。中学校は栖原地区内にあり急いで走れば5分ほどの距離。

学校での行事も多いが、学園や地域での行事も多い。宿泊登山、スキー教室、陶芸や木工等の趣味教室、畑仕事。そして村民の一員として郷土芸能等に参加したり、村の「ふるさと祭り」には学園の子供たち手づくりの陶芸品・皮細工、どら焼きの売店も出る。昨年は草木染のTシャツも売った。

行事のたびに、両親も出かけてくる。

「ご両親は年間10回程度出かけてきます。みなさん大変協力的で熱心です。だから以前より親、とくに父親などと話をしたり、何か一緒にする回数が増えたという子供が多いようです」と小倉先生。

「最近は登校拒否している子供を何とかしたいという問い合せが増えてきて、とくに中学生が多い。ここへ来ると登校拒否は一人もいなくなります。一般に親は山村留学させて、こういう子供になってほしいといろいろ望みますが、親が出来なかったことをここで一年間でマスターするのは無理です。子供自身が学校や友達を好きになってくれること。そして自然の中で子供らしさや自立心、他人への思いやりを身につけてくれればと願っています」

山村留学はあくまで子供自身の意志で決める。そのため夏休みに体験教室（3泊4日）を3回実施し、留学したい子供は11月下旬に1週間入園し、学校へも通う。希望があれば1月、2月にも体験入園できる。

●問い合わせ／「かじかの里学園」

☎0274（59）2137

毎年25名前後が留学
地域の郷土芸能も復活して
「広田村山村留学センター」（愛媛県）

▲上／山村留学センター「国木ハイランドビレッジ」で朝の体操　下／秋祭りに参加する子供たち

愛媛県でも野忽那島のような里親制度ではなく、全寮制の山村留学センターで子供を受け入れているのが広田村。

松山市から28㎞、総面積約44㎢の86%が森林で、人口は現在1340人。村には3つの小学校があるが、その一つ高市小学校では児童数の減少で平成元年には6人、2年、3年にはわずか4人になった。

このままでは廃校になる。しかも学校がなくなると地域もダメになると考えた当時の三好村長と地元住民の熱意により、4年4月に山村留学制度がスタートした。村では5600万円かけて留学センターを建設した。寮の管理運営、寮生の食事代等も村が助成しているため、保護者の委託料は月額3万8000円（8年現在）と他町村のそれに比べてもかなり安い。

小学校のすぐ近くに建てられた留学センターは、木のぬくもりがする赤い屋根のおしゃれな建物で「国木ハイランドビレッジ」とも呼ばれている。

マスコミ等で報じられたこともあり、初年度（4年）は定員20名に対して問い合わせが100数件、申し込みが38件もあった。そのため急遽ベッド数を増やし、4人は里親制にするなどして29人を受け入れた。翌年は27人、6年は20人、8年は23人が留学している。

全児童32人の高市小学校で、村外児童が8割を占めており、比率としては日本一ともいえる。

そのため、村の子供が多数の村外の子供にいじめられるのではないかという心配の声もあったが、村外といっても東京から沖縄まで全国各地から来ており、「問題は一切ない」と教育関係者は語っている。

センターでは専門の指導員4人が職員として24時間体制で世話をしている他、高市地域全戸がPTA活動に当たっている。新緑の中でのワラビ、ゼンマイ等の山菜取り、清流での川遊びや魚釣り、ホタル狩り、昆虫採集、秋は稲刈り、木の実やきのこ採り、冬は雪遊びなど、学校と地域が協力して自然とふれあう体験学習が目白押し。

とくに地元のお年寄りが喜び、留学生にとっても楽しみなのが、途切れていた獅子舞いや舎儀利等の郷土芸能が復活したこと。

「都市っ子でも、ここへ来れば〝高市っ子〟。区別はなく、地域の大切な一員です」藤山教育長は言う。

4年たち、延100名の子供が広田村から巣立っていった。教育委員会は「山村留学4年の歩み」という本を発行した。

子供達のいきいきした写真や地元の人、子供達、父母の言葉がぎっしりつまった冊子である。ほんの一部を紹介してみよう。

「洗濯も掃除も自分でして自立心がついた。いろいろな友達ができ、本当にいい仲間ができた。少人数の勉強で成績も上がりました」

「最初は不安だったけれどすぐにたくさんの友達ができた。ゼンマイ狩り、竹の子掘り、別府への修学旅行、田植え、夏は臨海学校やキャンプ、沖縄旅行など楽しいことがいっぱいあり、もう一度行きたい」（2年留学）

広田村では学校行事に、3校合同による音楽祭や修学旅行、水泳記録会などを実施しており、村全体の子供達に活力を与えると共に、留学生は高市小を代表する気持ちで頑張っている。

「東京へ帰ってきたら視力が1・5から2・0に上っていた」

「一輪車に乗れるようになったことが一番嬉しい」、「学習発表会で上手に話せたこと」、「先生が昼休みや放課後も一緒に遊んだり、スポーツをいろいろ教えてくれたこと」、「魚釣りが上手になった」、「雪合戦やスキー、バトミントンやサッカーなど、いろいろなスポーツを学び、やればできるんだということがわかった」等をあげている。

●問い合わせ／広田村教育委員会
☎089（969）2114

山村留学生 募集中の市町村

北海道へ自然体験留学

木工作の好きな子供や家族にピッタリ

■置戸町勝山地区の里親・家族留学

白い木の器「オケクラフト」で有名な置戸町勝山地区では5年前から山村留学制度を実施、ホームステイ（里親）、ファミリースティ（家族留学）で2家族3人が留学中。

勝山地区はJR置戸駅のある市街地から車で10分ほどのところにある農業、酪農地帯で、木工家の工房も多い。

勝山小学校は約40名の児童がいるが、「子供が同じ顔ぶれで小中学校を終えると価値観が固定されやすい。留学生を入れることで刺激を与えたい」と教育委員会の東谷さんらが中心に呼びかけ、地区の人々が賛同した。

神奈川県から男の子2人と父親を連れて留学してきた宮崎さん一家をはじめ、ニューヨークからやってきた一家、一人っ子なので大家族の酪農家へ里親した男の子、図工の好きな児童など、毎年5～6人の新入生が留学。

総工費約4億円をかけたという勝山小学校は床暖房で寒さ知らず。当然のことながら給食の器はすべておしゃれなオケクラフトを使っている。

同校カリキュラムの特徴は木工作を中心にした図工教室。子供の自由な発想で作った木工品は文部大臣賞や農林水産大臣賞を受賞。昼休みや放課後を利用して共同で大作を製作する風景もよく見られる。

ホームステイの場合は委託料が月4万円、ファミリースティは家財道具一式そろった住宅の家賃が月5000円～1万円。このほか夏休み等の短期間留学（ファームステイ）が一泊1500円で。

●問い合わせ／勝山小学校
☎0157（54）2320

■樺戸郡新十津川町　芳野小学校

石狩平野の一角にある農業、酪農の町。平成1年より小学生を対象に里親制度を実施、芳野小学校（児童22人）に現在5人が留学中。家族の一員として暮らしながら、スキーや農業体験、山林を生かした教育に力を入れている。親子留学も可。

●問い合わせ／芳野小学校☎0125（73）2009

■瀬棚郡今金町美利河（みりか）小学校

渡島半島にあり、温泉やブナ林もある景勝地。

都市の子供たちに体験を通じて生活の知恵や自然とのふれあいの心を育みたいと平成2年より実施。小学生を対象にした里親制度で、児童15名中11名が留学生。委託料は月4万円。

●問い合わせ／美利河小学校
☎01378（3）7403

■北海道で自然体験留学制度を実施している自治体——日高町、音威子府村、美深町、広尾町、中頓別町、白滝村、天塩町、東神楽町、斜里町、中川町、上士幌町、浜頓別町、津別町

木造校舎が楽しい我が家

「四季の子ども村」（新潟県牧村高尾）

牧村立高尾小学校は100年の歴史をもつ学校だったが、過疎が進むなかで8年前に閉校した。木の香のする校舎を保存し活かしたいと千葉から2組の家族が移住。農業（水田、畑各1反歩余）をやりながら、山村遊学、夏休み等の短期体験学習会を実施している。

体育館や運動場もあり、内部は多少改修していろりや大風呂もある。田んぼでコシヒカリを作り、畑では四季折々の野菜をたっぷり栽培、林ではしいたけ、なめこを採り、ニワトリ、犬、ウサギ、鯉なども飼育している。

世話をしてくれる木原さん（8人家族）、川坂さん（3人家族）の家族の一員として自然の中で遊び、学び、さまざまなことを体験していく。

現在、年間を通しての留学生は2人だが、夏休みや春・秋休み等の短期遊学（5泊6日）には50人以上の子供たちがやってくる。親子で農作業や収穫行事（そば打ち、みそ作り他）、スキー等に参加する人も多い。

3mを越える豪雪地帯だが、子供は毎日元気に2km以上の道を歩いてバス停へ行き、スクールバスに乗って牧村小中学校（児童数117人、生徒数128人）へ通っている。

・問い合わせ／四季の子ども村
☎0255（33）5184

大和・紀州の歴史ある山里で

関西圏の山村留学では、奈良県、和歌山県、三重県の町村が早くから実施。古い歴史をもつ自然郷で、人情に厚く教育熱心な地域である。本誌で紹介する町村以外では、奈良県御牧村、和歌山県粉河町、三重県藤原町他が実施している。

アマゴやカブトムシ取りも楽しめるよ「山びこ留学」（奈良県下北山村）

▶山びこ寮
▼清流での魚のつかみ取り

三重県と和歌山県の県境に接し、村一帯は吉野熊野国立公園の特別地域に指定されている。その山峡にある約700世帯の小さな静かな村で、下北山小学校には83名が学んでいる。現在山村留学児童は6名（男4名、女2名）。

留学生はアットホームな村立「山びこ寮」で暮らしながら通学。地域の人々の協力で、田植え、稲刈り、野菜づくり等も体験、近くの清流ではアマゴのつかみ取り、夏にはカブトムシ等の昆虫採集もたっぷり楽しめる。今までは留学生は原則として関西圏の小学生だったが、関東からの留学もOKとのこと。山びこ寮の生活委託費は月4万5000円（寝具は村が用意）。

・問い合わせ／下北山村教育委員会内
☎07468（6）0901

里親・家族転居で9名が留学 〝命の根〟を育てる留学（奈良県東吉野村高見地区）

東吉野村高見地区は奈良県の北東部に位置し、三重県境にそびえる高見山の山麓に広がる山村で、現在8集落に350世帯が点在している。村は林業を中心に発展してきたが、若者の流出等により人口が減少、児童数は30年代の約半分になった。地域住民の強い願いで平成4年よりはじまった山村留学は、一般の家庭で預かる里親制度。村内に茂る杉やヒノキの巨木のように、風雪に負けず、太く大地に根をはる子供を育てたいという願いから〝命の根を育てる山村留学〟がキャッチフレーズ。現在高見小学校の児童数は57名で、留学児童数10名。（里親4名、家族転居6名）。家族留学の人には改装した空き家を月3万円で斡旋している。

留学生の出身地は大阪が半分、続いて奈良、京都、東京、兵庫。地区のPTAと学校、留学生父兄との交流も密で、毎年PTA親子全員と来年度山村留学希望家族、留学生OB等が参加する「雪中登山」が名物行事の一つになっている。

・問い合わせ／高見小学校内事務局
☎07464（4）0304

▶田植えの体験授業（東吉野村高見地区）

有田川源流の里へ 清水町五郷小学校（和歌山県）

清水町は和歌山県のほぼ中央部にあり、太平洋に注ぐ有田川の源流に当たる山里。原生林の中を幾つもの清流が集まって有田川を作り、二川ダムがある。

山村留学は中原地区住民の全面協力で里親制度を導入、現在2名の子供が里親留学しているほか、家族移住で2

名が五郷（いさと）小学校に通学している。周辺を深い山々に囲まれた陽だまりの学舎で、現在17名の児童がマンツーマンの授業と体験学習を楽しんでいる。関西圏からの交通便も比較的よい場所に、このような静かで人情あふれる山里があることは驚きであり、貴重である。

・問い合わせ／清水町五郷小学校
☎0737（22）0352

▲100余年の歴史を誇る五郷小学校

青春時代を土佐で
高知県立9高校が県外生募集

公立の普通高校では全国ではじめて高知県教育委員会が、県外者からの高校生を受け入れることを制度化することになった。

太平洋や四万十川、石鎚国定公園の深い山々など豊かな自然を持ち、坂本竜馬をはじめ知名人を多数世に送り出してきた風土を持つ土地であるが、高齢化が進み若年人口の減少が深刻になっている。

県教委には、以前から「子供を高知で学ばせたい」という高知出身者たちの問い合わせがあったが、今までは制度上の制約があり実現しなかった。

平成9年度より、親代わりとなる身元引受人が高知県内にいれば、全国どこからでも受験できるようになり、一部の高校では身元引受人を探してくれることになった。

宿舎等は、一部の高校を除いて寮があるが改装の必要があるため、ホームステイすることになる。高校のある地区では県外から若者がくることを大歓迎、満足できる教育・生活環境を提供したいと言っている。

受け入れをする高校は、嶺北（本山町）、大正（大正）、梼原（ゆはら）（梼原町）、中村高校西土佐分校（西土佐村）、仁淀（吾川村）、追手前高校吾北分校（吾北村）、大栃（物部村）、室戸（室戸市）と今春開校の高知海洋（土佐市）の9校。

出願期間は第一次が2月10～14日、第二次が3月18、19日。問い合わせは高知県教育委員会高校教育課☎088（21）4735

青少年に、より豊かな自然を！
(財)「育てる会」の山村留学・短期自然体験活動

昭和43年に青木孝安氏（元教諭）により任意団体「育てる会」として発足して以来毎年夏休み、冬休みには自然体験教室を各地で開催。さらに長野県を中心にして5ヵ所に学園を持ち、山村留学生を受け入れている。山村留学制度導入の自治体への立案、指導にも当たる他、実態調査、都市と地方との交流会、社会教育指導者の養成、山村留学の広報啓発活動等にも力を入れている。

●短期自然体験活動

夏・冬、春休みの期間、広く青少年に参加を呼びかけ、各地で多彩な体験教室を開催している。

夏季は、「幼児と父母の自然体験」「幼児、低学年山村生活」約一ヵ月間の「長期山村生活」「座禅体験」「ヨット・カヌー」（諏訪湖他）、「北海道酪農生活」「南国無人島体験」（鹿児島）他。

冬季は、「雪の山村生活」「氷湖と渓谷の山村」「スキー教室」（低学から上級コースまで）等を新潟県松之山町、長野県八坂村、北相木村他で。

春季は、「早春の山村生活」「サバイバル体験」「春を待つ雪国体験」等。

●長期自然体験活動「山村留学」

(財)育てる会が自治体と協力して開設している「育てる村学園」は、5ヵ所にあり、そこに居住して自然体験、集団生活、労働体験しながら現地の公立小中学校へ通学する。

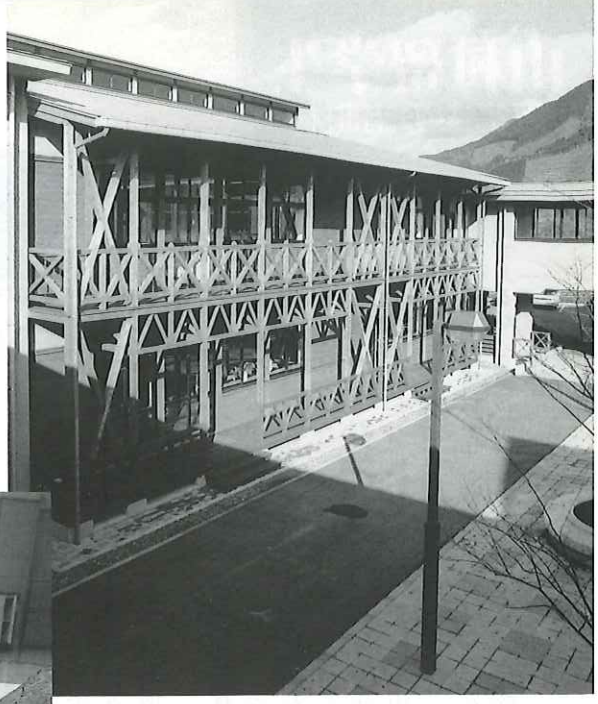
一ヵ月の約半分は学園（留学センター）で専任指導者と共に集団生活をするが、残る15日～一週間は農家へ里親に行くのを原則としており、地域との交流を大切にしている。

・「育てる村学園」の開設町村

八坂学園（長野県北安曇郡八坂村）
美麻学園（長野県北安曇郡美麻村）
売木学園（長野県下伊那郡売木村）
北相木学園（長野県南佐久郡北相木村）
松之山学園（新潟県東頸城郡松之山町）

(財)育てる会／
東京本部☎0422（56）0151、
関西事務局☎06（624）3631、
中部連絡所☎0568（78）3881

諏訪湖でのヨット・カヌー教室。左が指導に当たる青木理事長。



宮崎県立五ヶ瀬中・高校でフォレストピア授業を見学（宮崎県五ヶ瀬町）

公立では全国唯一の全寮制学校

数日前に小杉隆文部大臣が視察したばかりで、安ど感があったからなのか、職員室には開放的で自由な雰囲気が漂っていた。ヨーロッパの山小屋を思わせる校舎には、従来の学校が持っていた硬いイメージはない。宮崎県五ヶ瀬町のフォレストピア学びの森・県立五ヶ瀬中・高校である。

視察した小杉文相は、

「自然環境に恵まれ、少人数の全寮制で、ゆとりある理想的な教育だと思う」

とここの印象を語っている。

公立では全国唯一の全寮制中高一貫教育。自然環境を生かした特色ある教育の研究開発校として文部省の指定を受けるなど、教育界の期待を一身に担って3年前に開校。一学年40人、全校生徒が今年度は242人、全職員数は47人である。この3月、初めての卒業生を送り出す。

毎月2回行われている特別授業「フォレストピア授業」に合わせて、昨年11月最後の土曜日に訪ねた。初雪の降った朝だ。

学校全体にゆったりとした雰囲気が流れている。岩切正憲校長は、

「卒業まで6年間あるから、成長を待つことができる。それと、全寮制であるため24時間体制の本当の教育が出来るわけです。生徒同士も異年齢の交流があって、昔の大家族のようなゆとりある教育がここにはあるのです」

と全寮制一貫教育の良さを強調している。

もう一つは、自然環境の良さだろう。自然豊かな宮崎県にあっても、五ヶ瀬町の四季の変化は際だっている。春の若芽、夏の水、秋の紅葉、冬の雪。それも九州山地まっただ中の標高550m、大きな自然である。人生の中で最も感受性豊かな6年間を、しかも親元を離れて、大自然の中で暮らすことの意義は大きい。

地元が積極的に協力して

「フォレストピア授業」は、各学年でテーマごとに分かれ、地域との交流を通して学ぶ。たとえば、中学3年の地域基礎B教科は、産業、信仰と民話、

民謡、民具の四つのグループに分れる。高校2年は、森林文化、環境科学、天文観察と3つの教科に分かれ探求活動を行うなど、地域と密着したテーマが設定されている。

五ヶ瀬町第三区公民館長の宮野好和さん（62）は、椎茸について講義をしてほしいと学校から要望があった。

「ガキの頃には教壇に立ったこともないのですから、前の晩は寝ずに原稿を書いて、椎茸のルーツを話しました。私のことを先生と呼んでくれて、生徒たちはかわいいですよ」

と、孫に親われている好々爺の顔である。

この日のフォレストピア授業では、中3年生の民具グループが、この地域で現在も山仕事に使われているショイコを作っていた。

ショイコの設計図を書いた鶴田元樹くん（15）は、五ヶ瀬町と生活状況の似ている南郷村から来ている。

「本物をモデルに、材料に合わせて縮小して設計図を書きました。出身地の小学校はクラスが小さくて友だちが少なかったけど、ここの生活は、友達もたくさんいて楽しい。冬のスキーが一番楽しいかな。中学2年の夏休みが終わってからホームシックになったことはあったけど。」

県立五ヶ瀬中・高校に来ている生徒は、必ずしも都市部から来ているとは限らない。県立であるため全員が宮崎県内の出身者だ。最も多いのが、宮崎市の58名、二番目は延岡市の19名。その他、県内全域から集まっている。東京や大阪などの大都市から五ヶ瀬町に来た子供たちならば、生活文化の落差に悩むかも知れないが、今回の取材で出会った生徒を見る限り、その心配は無用と思った。もちろん、その背景には地元の積極的な協力がある。

赤谷商店街を核にした五ヶ瀬町商工会は、町長を会長として「学びの森協力協議会」をつくり、下部組織として衣料品部会、サービス部会、工業部会、食品部会がある。あらゆる面から地元として協力していく体制をとっている。

年一回、ホームステイも

組織的に地元で支えることとは別に、生徒のホームステイを受け入れる家庭と子供たちの結びつきが、精神的に大きな役割を果たしている。

年一回、夏休み前に1泊2日の日程で行われる。宮野好和公民館長は、

「地元では、当初からホームステイを想定していたから、受け入れはスムーズでした。思い出を多く残してやりたいということですが。女の子は、家の中のことなど何かと手伝いもあるけど、男の子は何もないから、朝はゆっくり寝ちょけよ、というようなもんですわ。ひと晩だけでは短い。すぐ時間がきてしまいますもん」

と残念そうだ。

子供たちに五ヶ瀬町の暮らしを教え、何とかこの土地に馴染んでもらおうと、この土地の神様や金比羅様へ一緒にお参りしたり、そば打ち道場へ連れて行ったりもしている。

宮の前地区の浄専寺の住職寺本哲郎さん（67）は、現在フォレストピア学びの森ができている所にあった県立高千穂高校五ヶ瀬分校の分校主任として長く勤めていた。

「ホームステイに来た子供らは、朝のお務めを一緒にして、本堂の掃除を手伝い、田んぼにも一緒に行きますよ。とにかく村が明るくなったような感じがします。学校が出来るまでは若い人を見かけることはなかったですから。」

赤谷商店街で、肉屋を経営する宮部勝さん（59）も積極的にホームステイを受け入れている一人だ。

「来春、初めての卒業生が出て行って、どんな人間に成長するのか楽しみですね。五ヶ瀬町を第二の故郷というような感覚を持ってくれるだろうと思いますよ。ホームステイに来た子供たちは、街に来たら声をかけてくれます。家族の一員みたいな気持ちになっているんじゃないですか」

たまたま学校に納める鶏肉を捌いていた手を休めて話す表情に、子供たちに対する親しみがにじんだ。

地元の人々からの評判は、すこぶる良い。大都会の教育現場が荒れている様子やコギャル報道にみられる中学生や高校生の荒廃ぶりを聞いている者として、あまりの落差に耳を疑いたくなってしまう程だ。

フォレストピア授業の天文観察で星の色と温度の関係を実際に確認する実験をしていた高校2年生の三輪陽子さ

楽しい夕食タイム（寮の食堂で）

ん（17）は、

「周りに何もなくてさみしいけれど、同じような心境の友達がたくさんいて、友達から学ぶことが多い」

と全寮制の良さを強調した。

寮の入浴時間の前に、副寮長の中学3年生窪園匠くん（15）と山本静香さん（15）にまなびの森の生活について聞いた。

「他の中学と違って、高校のことを考えないでよいから、中学の時から職業や大学を選べて、すごく得のような気がする」

「充実した生活をしている。勉強もできるけど、友達と接している時間が長いのがいいですよ。それに、親も居ない訳ですよ。ケンカもあるけど、いつも一緒にいるから何時の間にか自然に収まっているという感じで」

山本さんは、「テレビドラマを見たい」と、ささやかな願いを言う。

「そうそう、大学へ行った時、一般的な世間のことを知らなかったらはずかしい」と、相槌を打つ窪園くん。

六年間の一貫教育では、二人とも一期生。悩みと言えるほどの悩みはなさそうである。しかし、窪園くんが小林市の実家に帰ると、「近所の人が『すごいんだよねえ』と、期待しているようなのがプレッシャーになる。皆、僕が頭がよいと思っているから」

生きる力、学力がつく

県立五ヶ瀬中学校の入学試験は、学力テストを行わない。入学適性は、自分の故郷紹介や集団討議、グループで壁新聞を作るなどの過程で、協調性やリーダー性を判断する。

「学力テストをしないのですから、入学した時の学力の幅は大きいですよ。ここで大切なのは、当たり前のことが当たり前に出来ることが一番。相部屋の寮で、生活の全てが自分の責任ですから。いわゆる生きる力がすごくつくのでは」

帖佐利昭教頭は、生活力を強調する。

「学力は、ここに来てからつくのです。少数クラスでチームティーチング、たっぷりの時間。県内の私大コースの合同模試で一番と二番がここの生徒でした。ここで伸びているんですよ」

帖佐教頭は、初めから学力があったのではないと言う。しかし、この3年間、ここの入試の競争率は、平均10倍程度。かなりの狭き門である。

「全国で最も恵まれた生徒たちかも知れませんね」と、帖佐教頭が言うように、伸びる素質と恵まれた環境の中で、理想の教育を目指してポスト管理教育の方法が模索されている。

平成8年度後期の寮生大会が開催されるというので、夜まで滞在させてもらい、寮の夕食をご馳走になった。献立は、つみれ汁に卵サラダ、炒り鶏、ご飯、牛乳、果物（レイシ）だ。やさしい味付けで、ボリュームもある。気の合った者同士なのだろう、数人で一緒に食べている寮生の様子を見ていると、残す者はほとんどいない。

「寮では、友達と一緒に居られて楽しい。洗濯や風呂も共同の方が、暖かいという感じで好きだ」

「家と同じようにくつろげる」

食事中の寮生に聞いてみても、一様にここの生活に満足しているのがわかる。高校二年の建部壮さん（17）は、宮崎市の実家が送ってくれたという半纏を着て、自宅の居間に居るようにくつろいでいた。

開校から3年を経た現在も、外部からの視察や取材など訪問者が後を絶たない。卒論を書くための調査研究に訪れていた立教大学四年生の杉田和佳子さん（22）は、

「一貫教育の良さなのか、先へ先への教育とは違うようだ。都市部で同じ事は難しそうだけど。実践的に模索しているという感じ。始まったばかりの勢いを感じますね」

良いことづくめのように思えるが、当初から危惧されていた問題に、受験競争の低年齢化がある。現在でも競争率10倍である。小学校卒業時に篩（ふるい）にかけられることになる。

卒業時の不安もある。大学入試の現状、学歴偏重の社会がある限り、その対応策からは逃れられないのではないか。岩切校長は、

「高大の連係を考えなくてはならない時期にきている」

と、出口で再び元の制度に戻されてしまう危機感を持っているようだ。

6年間の一貫教育を終えた卒業生が巣立つのは、3年後。その時、大学の進学率だけで一貫教育を評価されるならば、せっかくの試みは萎んでしまうだろう。

学校の近くで、ホームステイを受け入れている電気工事業の興梠勝征さん（52）は、

「学校の子も五ヶ瀬の子と同じという気があっとよの。ホームステイだけで終わるのでなく、村で祭りがある時には、おはぎを作ったり、焼肉をしたりして子供たちを呼ぶとですよ」

と、地元と積極的に交わることを願っている。エリート養成の進学校になって、地元の片思いにならないことを願わずにはいられない。

まだ始まったばかりの教育実践。管理型社会に疑問を持ちながらの模索である。

（文・写真／芥川　仁）

［北の大地］で自然体験留学

先生、児童生徒20人のアットホームな学校

親子で学ぶ秘境のユートピア郷
富村牛小中学校（トムラウシ）（新得町）

●自主活動を重視して

東大雪山の山麓にある陽だまりの里、トムラウシ。酪農を主として22戸、77人が住み、児童生徒数は5人という地区だが、昨年から親子含めて14人が山村留学してきて、地域は明るくにぎやかさを取りもどした。

新得町は北海道のほぼ中央にある全国で4番目に広い面積を持つ町。十勝川の源流部にあり大雪山国立公園の東大雪一帯は、道内最大級の森林資源や数多くの温泉、地下資源に恵まれたところ。

トムラウシ地区は、新得町の中心部から約40㎞、車で約40分の距離にある。手前に十勝ダム、さらに奥に20㎞ほど行くと登山基地にもなっているトムラウシ温泉がある。

前方に日本百名山の一つトムラウシ山（2－4－m）をはじめとする大雪山の雄岳、眼前に十勝川の美しい渓流を望みながら走るこのルートは北海道の中でも特にダイナミックさにあふれ、トムラウシ温泉（国民宿舎「東大雪荘」）の人気もあって、年間を通じて人々がよく訪れる。

その一角、深い森に抱かれたトムラウシ地区の中心部に富村牛小中学校があり、現在13人（留学生9人）の児童生徒と7人の先生が家族的な学校生活を送っている。懐かしい木造の校舎は使いやすく整備されながら、温かいぬくもりにあふれ、子供たちは三、四人ずつで音楽、家庭科、体育などの授業をしていた。

新得町では、子供がただ一人になっても学校を存続させるという決意で同小中学校を見守ってきたが、一昨年山村留学制度を設けた。親子または家族留学が条件で、学校に近接する住宅が安く提供される。

反響は大きく、一昨年より池田町か

▲2年生の国語の授業。各教室ごとに図書や資料も大変多くて、夢のある楽しい雰囲気だ。

▲クリスマス集会のための音楽練習。1人が2コ持ち、時々違う鈴に持ち変えて上手に演奏する。

▲中学3年生は行事のたびに舞台作りの主役。

▲今日の給食当番は藤井さんと前田校長夫人。

ら留学してきた藤井君（中3）を皮切りに、昨年4月から東京都、神奈川県、千葉県から、小学生6人、中学生3人が体験留学してきた。（うち2人の子供と母親で鎌倉市から留学してきた野口さん一家は町内中心部に近い上佐幌小学校に）

「北海道の自然の中で母親も一緒に貴重な体験をし、学力もつけてたくましく育てたい、ということで首都圏からの申し込みが多かったようです。でも住宅に限りがありますので初年度は5世帯にしました。

大きな学校や都市では味わえないマンツーマンの学習、登山やスキー、山遊びなどの自然学習をふんだんに取り入れ、校則のない自主活動を重視した学校をめざしています」と前田奉洋校長は語る。

先生の子供たちも留学、校長の奥さんは学校給食を担当するなど、教師たちも地域、学校に親子ぐるみで取り組んでいる。

「お母さん同志の交流も盛んで、学校行事や運営にもとても熱心です」

お母さん達は毎日交代で一人ずつ学校給食の手伝いをするほか、植栽、家庭菜園などもはじめた。

●お母さんも給食当番に

学校から四、五分の距離にある借家が留学生家族の住まい。林野庁関係者の住宅だったものを改装した藤田さんの家に何人かが集ってくれた。放し飼いにしたウサギが玄関に出迎えてくれた。

藤田さんは小2、小6の女の子と神奈川県藤沢市から留学してきた。

「マンモス学校で、一人は登校拒否、一人はアトピーだったんですが、富村牛へきてとても元気になりました。テレビを持ってこなかったんですが見なくても平気。やりたいことが沢山あって充実しています」

気になるのは高校生の息子を実家の両親に預けてきたことだが、夫と息子も夏休みには出かけてきて北海道の休日を楽しんだ。

藤田さんはここへきて車の免許証も取得した。

石井さんは東京から中一の女の子、小5、小一の男の子と4人で留学している。

「憧れの北海道ですが、ここは特に魅力的。地元の人が親切に教えてくれ、私たちも野菜や花作りをはじめました。小中学生一緒に同じ屋根の下で学ぶというのもいいですね」

▼藤田さん（左）と石井さん。藤田さんの家の前で。

藤井さんは「中3の息子と一昨年の12月にきました。塾通いよりも自分で自主的に学ぶことを身につけてほしいと思っています」

自宅は池田町なので、土日曜日には帰宅して家族と過ごす。

百瀬さんは千葉県から小2の男の子、小6の女の子とやってきた。

「向こうでも楽しかったので、子供は留学にあまり乗気じゃなかったんですが、来てみたら楽しくて、もっといたいと言っています。地元の子供たちはとてもしっかりしていて、いい友達になったようです」

●バドミントンで全国大会へ

この小さな富村牛小中学校の自慢は全道中学校バトミントン大会で優勝して4年連続全国大会に出場していること。二人でできるスポーツとして10年ほど前から全校生で練習にはげんできた。

「人数は少なくても、その気になれば何でもできる」と子供も先生も自信を深める。全道大会には大学生、高校生のOBたちもかけつけ、先輩たちと練習する姿に注目が集まった。

農家のお年寄りが学校給食用にとじゃがいもを届けにきた。ホクホクの最高級品だそうで、トムラウシは火山灰土を生かして作られたスイカ、メロンの特産地でもある。学校給食にも地元産の安全でおいしい野菜や果物がふんだんに使われている。

給食室からおいしそうな匂いが漂ってきて昼休みのチャイムが鳴る。全員に集まってもらって記念撮影。みんな本当にいい顔している。

●問い合わせ／新得町教育委員会
☎0-566(4)5---

放課後、上級生も下級生も一緒にゲームや球技を楽しむ。

10年を迎えた「自然体験留学」形態も多様化して家族留学も

瓜幕（うりまく）小学校（鹿追町）

鹿追町の「自然体験留学」は北海道内でもいち早く昭和61年に開始され、瓜幕中学校に女子生徒がホームステイ（里親）した。

小学校では平成元年より導入、当初はホームステイだったが、親子で留学するための町営住宅ができたことと、平成3年には留学センターも開設され、留学児童、生徒が大幅に増加した。

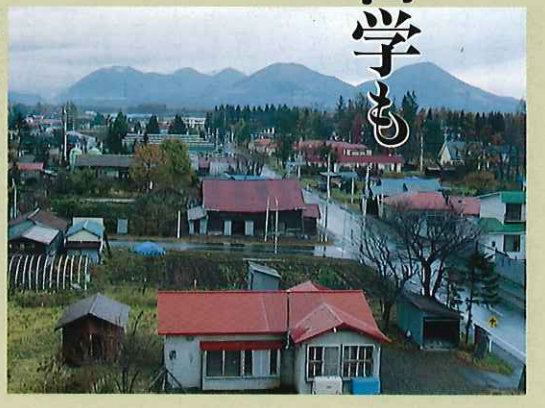
平成8年度からは、「お父さんも来ませんか。住宅も仕事も斡旋します」と家族留学を呼びかけ、神戸市から家族4人が留学してきている。

●家族で二年、三年留学

大規模な畑作、牧場が見渡す限り続く十勝平野の一角にある鹿追町。瓜幕地区は町の東北部にあり、新しい住宅や子供たちに人気のライディングパーク（乗馬クラブ）があるせいか北欧風な感じのするまち。広くて近代的な小学校、その奥に中学校があり、大正7年開校という古い歴史を持つ。

「瓜幕地区は大変にぎわう大きな地区だったんです。そのため町も瓜幕の発展が鹿追町の活性化に大切と力を入れています」と沼山満校長。

瓜幕小学校長として就任して2年目だが、以前教育委員会にいて留学生の受け入れを推進した一人。



町営住宅が多い瓜幕地区

小馬の世話をする原田さん。

パソコンでゲームを楽しむ男の子たち。

各自一台、全員が一輪車に上手に乗れる。

馬の扱いもすっかり板についた川中さん。夕方には厩舎へ運ぶ手伝いも。

「家族で来ている人、二年、三年と継続して留学している子供が多いですね。乗馬教室、森林教室、然別湖でのカヌー試乗、パークゴルフ、熱気球試乗などの自然体験学習に加えて、農園栽培や廃品回収などのボランティア活動、ライディングパークの馬の世話などの勤労奉仕活動にも力を入れています。東京と大阪、神戸の都会っ子が多く、それなりに問題をかかえて来ますが、ここへくると全員が欠席ゼロ、いじめもいじめられっ子もゼロになります」と校長先生は嬉しそうに語る。

昭和30年には300名近い児童がいたが、40年後半あたりから急減し、平成元年には37名になった。留学生の受け入れで徐々に増加し、平成8年現在49名（うち自然体験留学生が11名、転入生が3名）になり、留学希望者が多いことから今後さらに増えそうだ。

放課後の体育館では、若い先生を友達のようにしてチビっ子も上級生も一緒に球技やゲームを楽しんでいた。隣の視聴覚室では男の子たちがパソコンに熱中。学校が楽しいらしく下校していく子供の姿がない。

同校では障害児も2名在学している。

●馬の世話が楽しい

4時近くになって2人の子供がライディングパークへ走り出した。川中妥恵ちゃん（小5・神戸市）と原田敦子ちゃん（小4・神戸市）。ライディングチー

ムに入ると交代で馬の世話をするが、妥恵ちゃんは一日も欠かさず出かける。厩舎の掃除を手伝ったり馬のブラッシングなどをすると乗馬もさせてもらえる。

2人が行くと大きなサラブレッドや小馬が親しそうに近づいてきた。たずなさばきも上手で、馬たちは二人のブラッシングを気持ちよさそうに受けている。

ライディングパークは町が経営する道東随一の設備を誇る馬の公園で、サラブレッド、ばん馬、小馬などが13頭いて、乗馬教室を開講している他、8月にはばん馬レースも行われる。

「馬がいるから瓜幕がとくに好き。ずっといて大人になったらここで働きたい」と言う妥恵ちゃんは留学センターにいて2年目。「わたしも…」と新人の敦子ちゃん。まだ見習中で、妥恵ちゃんのアシスタントとして一生懸命だ。

夕食後に留学センターへ出かけてみた。中学生5人、小学生2人が入所していて、聞いてみると全員がライディングチームに入り、「乗馬できるからここが好き」と言う。

瓜幕中学校は生徒数37名で「生徒数が少ないので勉強が楽しく、学力もグーンと上がった」と女子生徒たちがうなずき合う。

原田太起君は中一の時静岡からきて3年生。「こっちの高校を受け、将来も北海道で暮らすつもりです」ときっぱりと言い切った。

なお、ライディングパークでは自然体験留学一期生の北村周子(ちか)さん(21歳・大阪出身)が職員として働いていた。馬が好きでアメリカへも研修に行ったが、鹿追町が好きで3年程前に再び来町、馬の飼育、乗馬の指導に当たっている。

▲留学センター。夕食後のひととき居間でくつろぐ。
▼宿舎は2人1部屋。きれいに整頓している。

神戸から憧れの北海道へ 波田さん一家の「家族移住」

波田隆幸さん一家は昨年神戸市から〝家族移住〟で留学してきた。奥さんの公子さんと小学3年の綾ちゃん、中学一年の渉(わたる)君と4人で、新築の町営住宅に住んでいる。

神戸では父親の会計事務所を手伝う税理士だったが、北海道への夢を絶ちがたく、ご主人がみんなを引きつれて「行くぞーッ」といって来たらしい。

「地震の影響で仕事を従来通り続けていくことの不安はありましたが、住んでいたマンションも大丈夫でしたので罹災家族ではありません。そのマンションを売り、保険代わりにいろいろのライセンスを取り、私一人がひと足速く来町して準備しました」

現在隆幸さんの仕事はトラックの運転手。

「ダンプの運ちゃんですよ。しばらくは肉体を使って北海道の大自然の中で働いてみようと決心して。しかしはじめて一カ月は死ぬかと思ったほどで、10キロやせましたね」

今まで専業主婦だけできた公子さんも鹿追へきてパートで事務の仕事をしている。

「ここの家賃は月2万7000円と安いのですが光熱費がかかりますね。神戸には高校一年の長男を残してきたので、生活費を送ってやらないと。私も働きに出た方がいろいろの人と知り合いになれます」と公子さん。

両隣の4軒もみな新しく入居した家族で、お母さん達の交流やPTA活動も盛んのようだ。

朝早くから働きに出る父親の姿を見ながら二人の子供は大きくたくましく育っていくことだろう。

●問い合わせ／鹿追町教育委員会
☎0156(6)2646

(写真／小林恵・文／浅井登美子)

「でぼら」エッセイ

本ものの自然にふれて子供は変わる

汐見稔幸（東京大学教育学部教授）

日暮里中学と安曇野農家の交流

東京下町の日暮里中学校では中二になると全員で長野県の安曇野の農家へ出かけ農業実習をしてきた。土や自然とふれあうこともなく、自分の体を精一杯働かせた体験もない子供たちがそのまま大人になっていくことを心配した教師たちの熱い思いが安曇野の農家の人々の心をゆさぶり、1975年（昭和50年）8月よりはじまった。

中学三年という進路をめぐるいら立ちや思春期の傷つきやすい不安定な時期。登校拒否の子も、拒食症でやせて体力のない子も、つっぱっていた子も、何しろ三年生全員が出かけていった。受入れてくれた農家の人々が大変良く努力してくれたこともあり、農家のおじさん、おばさんの前で子供たちはホッとし、素直になり、労働して汗することで生気を取り戻し、笑顔を見せる。

つっぱっていた子が皆んなに見守られながら劇的に変わっていく様子に教師も父母も驚いた。帰ってくると生徒は感想文を書くのだが、それを読んだ教師は、「我々がいろいろ時間をかけて教えるよりも二、三日の体験学習の方がはるかに成果がある」と述べている。

普通は3泊4日の日程だが、中には一カ月近く農家に泊まって実習をする子供もいて、この体験学習は父母会でも話題となり、日暮里中学校恒例の行事として引き継がれていった。三年になると安曇野へ行けると、生徒たちも楽しみにしていたようだ。

山村留学の先駆けともなり、我々も注目してきた農業体験学習は15年間続けられてきたが、当時の先生方が全員いなくなったのに加えて、生徒の一人がわらを切る作業中に人さし指の爪の先を切るという小さな事故が発生。責任を問われる行事は行いたくないという教師たちの意見で中止になってしまった。

それを聞いたかつてのつっぱり少年等卒業生が「後輩にぜひ体験学習を経験させてやりたい」と署名運動をし、父母会も継続を望んで、学校行事ではなく自主行事として行われてきたが、ハンデのある生徒も含めて全員が参加し皆んなで助け合うという当初の方針が失われたため、最終的に取りやめになってしまった。

八坂村「育てる村」の夏休み農業体験

「生活」の実感が少ない都市の子供たち

いまの子供たちは「生活とはこういうものだ」ということを頭では知っているが、体で感じることがない。都会ではお金を出せば何でも手に入るので、手に入れるために体を使って汗を流すことをしない。安曇野で子供は生活とは本当はこういうことだったんだということを実感として知ることができた。

私には八ヶ岳山麓に山小屋があり、3人の子供を小さい頃からよく連れていった。ある年の冬、雪が多くてあと100mというところで車が入っていけない。夕方6時からライトをつけてスコップで雪かきをはじめ、完了して小屋に入りストーブをつけたのが午後10時。翌日は水も出ないので雪を溶かして湯を沸かす。その水のうまさ、ご飯のおいしさ。子供たちは感動して休日を過ごした。

便利さを至上価値にする都会の生活は、人間を傲慢にしてしまう。厳しくもやさしい自然にふれ、土をいじったり汗をかいて労働した時は、人間は謙虚になれる。

生身の本ものにふれることである。

私はある通信教育の会社が一、二歳児用に作った教材を、見てコメントしてくれと言われ、困ってしまったことがある。

毎月ビデオを送ってきて、母親と幼児はそのビデオを見ながらしつけや知能を高めるための勉強をするのだそうで、流行っているのだという。

アニメの画像から「これが丸だね、これは三角だね」というように伝えてくる。本ものにふれずに、これで知識を得るのだという。

でも何か違う気がする。砂場でトントン砂をたたいて作っていくうちに丸いものができて、想像力をいっぱい働かせて意味づけて、それでもうまく出来ず、丸や三角を作るのは意外と大変だというようなことを学んでいく……。

そうした体験と、ビデオでてっとり早く「知識」を覚える体験の違い。

風や空気、水、星というものにふれることで、人間はその存在の後ろにある深みを年齢相当に感じる。自然は無限に想像力をかき立ててくれる。星を見ていると宮沢賢治の「銀河鉄道」などに一層興味が出てくるものだ。

いまの子供（親も含めて）は、モノについての情報は過剰までに与えられているが、モノそのものにはなかなかふれられない。モノそのものにふれることと、モノについての情報を手に入れるのとは、およそ体験の質も意味も違ってくる。本当の生身のモノにふれないと、人間は自分がなぜ存在しているかさえわからなくなってくるものだ。

子供たちに〝自由時間〟を山村留学に求められるもの

山村留学は、子供が体験している時はわからないかもしれないが、深い記憶の中に生かされていて、何かの時に蘇ってきて、自分を見つめ直したりする時に生かされてくる。山村留学したからといって農業実習をしなくてもいい、ボケッと自然と向き合っているだけで充分。その心地よさを知るだけで人間は変わってくる。子供は子供なりにそこで何かを見つけ出しているはずだ。

いまの子供たちは、次から次へと外から目標を与えられて生きているようなものだ。90点を取れば次は100点を取れと言われる。そういう仕組みに慣らされてしまっているので、目標がないと生き方さえわからなくなる。東大の学生の中にもニンジンをぶらさげていないと走れないという若者が増え、そのために何かを求めて空しく動きまわっている。

山村留学では、子供たちに〝自由時間〟を充分とってやってほしい。素晴しい自然環境や体験学習ができるのだから、都市の延長で、あれをしろ、これをしろと教え込むのはやめてほしい。

そこで何かを見つけ出し必ず変わってくる。それをゆっくり見守ってやってほしい。都市の理論でやるのではもったいない。

私の友人がスペインに行き、彼らのバカンスにつきあってきた。彼曰く「日本人にはとても退屈で耐えられないだろう」。

スペインは経済的には貧しい国だがみな一カ月休暇を取り田舎へ行く。日本人のようにテレビを見たり本を読むというのではなく、何も持たずよく喋りながら自然の中を歩きまわり、どこかの店に入って食べてまたよく喋

りまくる。砂浜に立って話題ができ、鳥が飛んできて話題ができる。

その話を聞いて、本当に心を受動的にできるから能動的にもなれるのだろうと思った。

日本人は旅行にもよく行くが、自然やその土地の風土をしっかり心に受動するというより、忙しく見てまわり、何かをちょっと体験することで終ってしまうことが多い。人工的なものが少なく、自然や豊かな農業大地がそのまま残っているから素晴らしいということの価値を、農村の人も見失っているようだ。

都市に媚びない 堂々とした田舎を

日暮里中学の生徒の農業体験感想文に共通していたのは、日本の農業は大変だな、ということだった。あんなに一生懸命作っているのに農業では食べていけない、機械を入れて大規模経営をしても赤字になってしまう。食糧はとても大切なものなのに、それを作っている農家の人達が食べていけないのはどうしてなんだろうという矛盾を感じたと書いている。

私は八ヶ岳で親しくしてもらっている農家の人がいて、その人と話をするのが好きだ。その人は決して都会に媚びない。

「サラリーマンの気が知れない。俺は気分の乗る時しか仕事をしないよ。人間とはもともとそういうものだ」と言い、基本的なことは手ぬかりなくするが、マイペースで農良作業を楽しんでいる。

彼が休耕地を2000坪ほど借してくれた。私も農業をはじめ出したが、忙しくて長続きしないので、友人の鍼灸師の人に使ってもらっている。彼は患者たちと月1回程度はその畑へ出かけ（自分はもう少し出かける）、そばを栽培してはそば粉を打ち、大豆を栽培しては味噌を作るなど活用している。患者といってもストレスや心の病から来る身体の病気が多く、最近は20代の精神病状を訴える若者も来る。デリカシーのある人ほど都会の生活から落ちこぼれやすいのだ。

そんな患者にとって農作業や物を作るというのは治療にも役立つ。彼らはいま縄文人になる夢を抱いて縄文小屋を作りはじめている。

いずれにしても、21世紀の人間は、二拠点人間にならざるを得ないと思う。都市で働きながら、もう一つ自然をベースにした場を持ち、心身のバランスを上手に保っていくこと。

そのためにも、農山村は堂々とした田舎であってほしい。都市に決して媚びず、いたずらに都市化せず、農業をこよなく愛する人々が生活している場であってほしい。

農村の活性化のためにも山村留学はすばらしい制度だが、もっと自由に行き来できるようになるといいと思う。今後は、高校、大学、専門学校などでも従来の「学校」のワクをはずした学習の場を地方に開設していくだろう。

場合によっては現在の学校なんてなくなってもいい。教師も大変苦労の多い時代だが、教師同志の研修会よりも、180度視点を変えてNGOにも行ってきた方がいいと私は思っている。

教師は一般的に、文化芸術を伝える役目は果すが、自らが文化を作るということはあまりしていない。農村の体験学習は、まず教師たちからはじめようではないか。

農家の人々と接して子供は感動する（小野寺三彦「里の人々」より）

●しおみ・としゆき氏＝1947年大阪生まれ。東京大学教育学部卒業後、同大学教育研究科博士課程修了。専門は教育学、教育人間学。幼児・児童問題に関心があり、各地の研修会、講演会に招かれることが多い。

▲北海道酪農地帯の夜明け（新得町）

「大地」に夢を托して

社会人・学生の山村フィールドワーク

豊かな自然の中で、農業に関りながら暮らしたいという若者が徐々に増えてきた。それに対応して、農家の暮らしを知ってほしい、自然と共生しながら生きることの魅力を体験してほしいと、「大地」のグループや農家、技術者集団が若い人を対象にした体験セミナーや研修活動を実施し、人気を博している。これらの一部を取材した。

▲朝夕、酪農家へ実習に（レディース・ファーム・スクールの女性たち）

▲高畠町の農家へ研修、立教大の学生

▲大工さん体験セミナーの若者たち

▲「語らいの里・嶄野」を主宰する吉田さん（左）

社会人・学生の山村フィールドワーク①

大工さんの体験をしてみませんか

「付知峡ひのきの家」体験セミナー（岐阜県付知町）

人気のある付知町「付知峡ひのきの家体験セミナー」を取材した。

●県の助成で3町村が実施

〝木の国〟岐阜県では、長い年月をかけ人々が育ててきた森林と木材、その銘木を使って作られる伝統建築を若い人が関心を持ち、継承していくことをめざして3年前より「日本伝統建築短期セミナー」（通称・大工セミナー）を主催している。

県林政部の呼びかけで実施しているのは、古川町、付知町、上之保村の3町村。対象は将来大工になりたいという中学3年から25歳前後の若者。一週間から5日間、大工さんの家や開催地区の民宿等に泊って、大工のベテラン達から木の見方、道具の使い方、家作りなど、大工仕事の基本を学ぶ。

県が助成金を出してくれる上に、指導に当たる大工さんはボランティア。そのため参加費は一人1万5000円と安く、定員約20名に100人以上の応募がある。

3年を経て、3町村はそれぞれの特色を生かしたカリキュラムで実施されるようになり、夏休みの体験学習会として定着してきている。

●ここでも女性が積極的

付知町は〝裏木曽〟とも呼ばれ、江戸時代より徳川幕府の直轄地であった杉・檜の名産地。昔から腕のいい大工さんが多く伝統的な日本家屋を世に送り出してきた。

体験セミナーは、3年前の初年度は25人を受け入れ、大工の家や旅館などに泊めて一週間実施したが、お盆前ということもあり世話をする方は大変。一昨年より定員を20名、5日間コースにし、民宿を貸切って実施している。

100名応募してきた中で選出された20名は、中学3年生が6名（県内の大工さんの息子が中心）、16歳～18歳の高校生・専門校生が5人、愛知県の県職員もいる。

今回は熱心に応募してきた岐阜女子大の学生ら女子が6人参加した。

指導に当たるのは付知峡ひのき建築協同組合の理事で棟梁でもある小南万六さんと副理事の北原公己さん。

家業は息子にまかせてセミナーの運営に当たり、普段も組合事務局を手伝っている。

組合がモデルハウスとして建築した2階建ての総ひのきの家が国道沿いの〝道の駅〟広場に建っていた。大工の伝統的な技をあますところなく採り入れた格調と木の香に満ちた素晴しい家である。

その一階が組合の事務局にもなっている。27事業所（130人）が組合員。「ここの大工はおかげ様で各地で引っぱりだこで後継者もいるが、大工希望の若者は県全体では10年前の6割に減っており、人手不足は深刻です。このセミナーは大工になりたいという若者

指導に当たる北原さん、小南さん（右）。モデルハウスの前で。

を一人でも多く発掘する機会にすると共に、地元の若者たちにも刺激を与え、日本伝統建築に関心を持ってもらうのもねらいの一つです」と小南さん。

「それにしても、女の子のパワーは凄いね。男の子が大工道具を扱ったことがない、高い所は目がまわって登れない、と言っているのに、女性は頭の回転も早く、道具はたちまち使いこなすし、高いところへも平気で登っていく。これからは女性の大工さんもいいね。大工がダメなら建築会社の事務とか大工の女房になってくれると力強い」

まずは道具を使って実習。

休憩と昼食が待ち遠しい。

●みんなで家も建てた！

セミナーは第一日目は町内を見学しながら杉・檜の巨木の林や製材所、木工所をまわり一枚の板がどのようにして誕生するかを学ぶ。夜は歓迎会。2日目は午前中講義を受けたあと、早速道具を使って実習。高価な檜などにノコギリ、カンナ、カナヅチ等を当てていく。

「昔は道具を一人前に扱うまでに10年といわれ、みんなが寝しずまった夜中にも腕を磨き、小遣いをためては道具を買い揃えていったものです。いまは機械もあるので二、三年もすれば何とかモノになりますよ」

と語る小南さんは、県の依頼を受け、伝統建築の技術に関する本を執筆中。

3日目から建築中の家を見学し、みんなで小さな小屋作りを試みる。その頃になると高所恐怖症と言っていた若者も高いところへ登れるようになり、クギを打つ音もリズミカルになってくる。4日目、大工さん達の協力もあって物置小屋が完成した。木のぬくもりが心地いい。

最後の日は、午前中にそれぞれが木棚、額などの作品を作り、優れた作品には記念品を贈呈しながらお別れの食事会と閉講式。

朝8時から実習というハードな5日間だったが、参加した人達は「来年もぜひ来たい」「大工に興味を持った」「付知町で働きたい」などとその感動を語っている。

嬉しいことに、今年4月には一、二期にセミナーを受けた人の中から3人が来町して大工の見習になることが決っている。

なお、前述のモデルハウスに見られるような付知峡ひのきの家がプレハブ住宅並みの坪60万で建てられるというPRも加筆しておこう。

●問い合わせ／付知峡ひのき建築協組事務局☎0573（82）4554

家を建てるための基礎作業。

社会人・学生の山村フィールドワーク②

森のログハウスで語り合おう

田舎と都会の交流拠点「語らいの里・噺野（はなしの）」（三重県大宮町）

「語らいの里・噺野」の本館。吉田家の杉と檜で作られた本格的ログハウス。

先祖代々続く林業家の11代目当主が、年来の夢を実現した。所有する広大な山林の一部を解放し、そこに建てたのは壮大なログハウスと数棟のコテージ。

自然に親しみ、林業を理解してもらい、そして山村と都会の人々が交流できる場をつくろうという当主の夢は、地域を始め、さまざまな分野の人をまき込んで、杉と檜に囲まれたこのログハウスからスタートした。

●50歳からのライフワークとして

「山林業・吉田善三郎」――差し出された名刺の肩書きは何ともシンプルなものであった。しかし吉田さんには、森林王・吉田本家11代目というもうひとつの肩書きが、暗黙のうちについて廻る。

吉田家は代々林業を営んできた三重県を代表する林業家だ。歴代の当主が木を育て、買い広げてきた山林は、善三郎さんの代で1100町歩に及ぶという。その林地は三重県度会郡大宮町を中心に、大台町、紀伊長島町、さらには南の尾鷲にまで広がっている。大宮町の小高い山々を見渡していると、

「あの辺りから、向こう一帯、その奥の山々が大体ウチの所有林です」

と当主の吉田さんはこともなげにいう。

つまり周囲を見渡して、視界に入る山はほとんどが吉田家の山ということになる。11代という年月の重みを改めて感じさせられるスケールだ。

父上の家業を継いでおよそ20年というその吉田さんが、50歳からのライフワークとして取り組みはじめたのが、「語らいの里・噺野（はなしの）」と名付けられたコミュニティの拠点づくりだ。

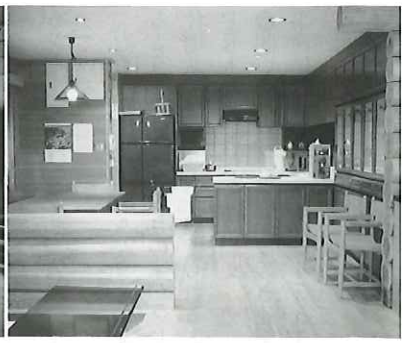
長年林業を営んできた吉田さんにとって、森を育てることは、同時に人々の心に安らぎを与える環境づくりでもあった。森はそんな力がある、そう信じてきた吉田さんの思いは、一冊の本との出会いによって一気に現実のものとなった。

木村尚三郎著「耕やす文化の時代」。木村氏はその著書の中で、「技術文明が成熟した今日、都会にはもはやほんとうに新しいものはない。土と親しむこと、これからの私たちにとって最大の喜びとなるだろう」と書いている。さらには都会と田舎の人間同士の交流、ふだん着感覚のつき合いの大切さにも話は及んでいく。

「まさにコレだと思ったんですね。林業という仕事を通して私が長年漠然と考えてきたことが、この本の中に凝縮されていたんです」

吉田さんはこの本に触発され、「語らいの里・噺野」という田舎と都会を結ぶコミュニティの拠点づくりを思い立

2階ゲストルーム。作家や作曲家などが泊った。外には広大な緑が広がっていて気持ち良い。



木の香あふれる本館内部。ダイニングコーナーの地下にはワインセラーも。

アメリカからきたジュリアード音楽院の学生たちとの交流。

「緑のおじさんをめざします」と吉田さん。

ったという。

●めざすは「森の文化」の発信地

まっすぐに伸びた檜の森を背に、「語らいの里・嘶野」の壮大なログハウスは建っている。30名が語り合えるメインルームと応接室、ゲストルームを備えた130坪余りの本館は吉田家の山の杉と檜で造られた見事な本格派ログハウスだ。平成4年4月にオープンした。

中に入ると何とも気持ちの良い空間が広がっている。北欧のリゾートホテルを思わせる趣味の良いインテリア、森の中にいるような香り高い檜の匂い。2階のゲストルームには作家や音楽家など、これまでに何人もの文化人たちが逗留し、緑の中の贅沢な時間を楽しんだという。

同じ敷地の中には他に10数名が宿泊できるコテージ風のログが3棟、さらに自炊棟、管理棟、四阿（あずまや）、それに檜のプール、温泉までもが備わっているという豪華さだ。設計デザインは吉田さんのブレーンでもある地元の若手デザイナー奥山寿一氏が当たった。

「ここを拠点にいろいろな人たちが交流の輪を広げてくれたらと思っています。特に田舎の人と都会の人とが語り合える場、そこで森づくりの楽しさを話したり、互いの情報交換や夢を語り合ったりと、そんな場所になってくれたらと考えているんです」

と当主の吉田さんは話す。

田舎と都会。その両者はどちらが上でも下でもなく、またどちらが孤立してもつまらないものだと、吉田さんは考える。互いに刺激し合い風通しを良くすることで、世界はぐんと広がるのではないかという。

こうした吉田さんの発想の原点には、吉田さん自身の田舎暮らし、都会暮らし両方の体験が大きく関わっている。中学校までを大宮町で過ごした吉田さんは、高校から東京へ出て、慶応志木高校、慶応大学へと進み、その後さらに東京大学農学部林学科の研究生となって2年を過ごしている。10年間近くの東京暮らしは吉田さんに故郷の素晴しさを再発見させ、また田舎と都会どちらの良さも受け止められるバランス感覚を育くませたようだ。

今では「語らいの里・嘶野」はそうした田舎と都会の交流だけでなく、さらに広がって国際交流、子供の体験学習、林業体験学習の場としても活用され始めた。

平成3年にはスリランカ大使夫妻、県国際交流財団事務局長を始め、英国ウェールズ会の関係者や、県内在住7カ国の留学生などを招き、地元の学生や林業関係者らと親交を深めた。林業体験学習では、三重県が創設した農林水産業後継者育成基金の事業を応援する形で、林業イメージアップ作戦を展開。「語らいの里・嘶野」がその拠点となって、県内の若者たちに森林作業等を楽しく体験学習させた。

また平成4年には大宮町との共催で「第一回森の文化ふぉーらむ」を開催。各界から招いたパネラーたちによって、木材を生産するだけではない森林文化の新たな価値や効用が提言された。

他にもアメリカからジュリアード音楽院の学生を招いたクラシックコンサートや、音楽家森みどりさんのピアノコンサートなど多彩なイベントが実施され、「語らいの里・嘶野」は大宮町の人たちのコミュニティの拠点として、今では欠かせないものとなりつつある。

「この仕事は事業として利益を求めるものではなく、あくまでも私の趣味として、さらに言うならば道楽として行うものなので、運営維持費は本業の方からの持ち出しになっていますが。まあ、本業にあまり悪影響を与えない程度ならば良しとしようと考えています」

と吉田さん。

吉田さんの年来の夢は、地域に根をおろし「森の文化」の情報発信地として、さらに大きくふくらんでいこうとしている。

●問い合わせ／語らいの里・嘶野
☎0598８（6）3061

（取材／金山淑子）

▶酪農受け入れ農家の人と懇談会
▼レディース・ファーム・スクールの建物

▶上／女性らしく手入れされた2階の宿泊室
下／一日の中で一番のんびりできるランチタイム。

社会人・学生の山村フィールドワーク③

北海道で酪農・農業を「レディース・ファーム・スクール」で学ぶ女性たち

（北海道新得町）

「将来、営農をしたい方、農業へのかかわりの夢を抱き続けているあなたへ、一歩踏み出すお手伝いをします」と呼びかけて、昨年8月に北海道新得町の上佐幌に「レディース・ファーム・スクール」がオープンした。

全寮制のおしゃれな施設に一年間宿泊して、ここから通いで近くの酪農家、肉牛農家、畑作農家などへ体験的実習を重ね、農業や農村の良さ、酪農等に欠かせない技術を身につけてもらおうというもので、対象は女性。

新得町役場農林課が窓口となり、上佐幌地区農家が全面的に協力、施設は町が総工費3億5000万円かけて建設した。

北に大雪山、東南部に十勝平野を望む広大な丘陵地帯。酪農家が点在し、牛たちが草原でゆったり草を食べている。そんな上佐幌地区の中心部に、おしゃれなペンション風の施設「レディース・ファーム・スクール」がある。

一階は講習室、研修室、農産物、畜産物等の加工実習室に厨房・食堂、二階が宿泊室と談話室。各室ともベッド、収納家具、バス、トイレ付のゆったりした部屋で、研修生は個室が与えられる。

年間研修生は10名。オープンに先駆け募集したところ、問い合せが数十件に及んだ。その中で、農家の代表や役場職員がセレクトして10名を選出した。

他に、一カ月単位の短期研修生も随時受付けており（畑作農家へは夏期間のみ研修）、そのための部屋も用意されている。

●「将来も農業に関っていきたい」

訪ねた日は午後から酪農家と研修生との懇談会が行われていた。研修生を受け入れている農家は9軒あり、3カ月ごとに受入れメンバーを組み変える。そのための打合せを兼ねていろいろ意見を交換し合う。

「僕らは若くてみな独身です」と受入れ協議会代表の太田さんが冗談を言えば、研修生リーダー格の神林さんが、「ここの酪農家は皆さん若くて研究熱心。でも残念ながら独身の男性はいないんです」と答える笑いの一コマも。

福貴さんは大阪出身。1年前に北海道へきてレディース・ファーム・スクールに応募した。将来、農業（酪農）に関っていきたいという夢が、ここへきてはっきり見えてきたような気がすると語る。

茨城県からきた原田さんは、北海道に憧れて。農業にも関心があるので、この研修を一つの転機にしたい。

横浜市出身の神林さんは、OLをしながら都市生活に疑問を抱き続けてきた。汗を流して大地で働きたい、酪農

研修の古川さん(左)と山根さん。搾乳も手慣れたもの。

に興味があるので、研修を終了してもここに留まって酪農ヘルパーとしてやっていきたい、と語り、農家の主婦たちや都市からの移住者とも積極的に交流している。

釧路市からきた佐藤さんは畑作が希望。納得できる野菜を作って都市の人と産直などするのが夢。

研修には、酪農(肉牛)、畑作コースがあるが、畑作コースの人は秋の収穫期が終わると、酪農コースを体験する。

畑作を研修した佐藤さんは「憧れの実習作業でしたが、広大な畑で連日、炎天下でのキャベツ収穫作業。最初の一カ月は本当にきつかった。搾乳作業は朝早くて大変だけれど、日中少しのんびりできるし、牛のつぶらな瞳がたまらないですね」と語っていた。

研修生たちは朝5時半には起床。6時すぎには酪農家へ行き、搾乳等の手伝いをして、朝食をごちそうになり、帰寮は11時~12時。それから、午前中は洗濯や道具の手入れなどして昼食。午後は二時間ほど休息をとり、夕方4時頃から再び研修に出かける。

「早寝早起き、食事もおいしくてモリモリ食べるというとても健康的な生活。都市の生活がウソのようです」

食事の世話や寮の管理をする夫妻は、「みんな本当に明るくてよく頑張っている素晴しい娘さん達。息子がいたら全員をぜひお嫁さんにしたい」と目を細める。

●「牛と一緒なら頑張れます」

翌朝6時に受入れ協議会会長の太田義正さんの牧場へ見学に行った。夜中にかなり激しい雨が降ったが、今日は何とか晴れそう。11月半ばで気温は2~3度。から松林の向うの東の空から真赤な太陽が登り出した。

太田牧場ではすでに搾乳がはじまっていて山根さん(山口県出身)、古川さん(富山県出身)の研修生がテキパキと働いている。

「冬にはマイナス10度以下になるそうですから大変でしょうが、農家の人も牛たちも頑張っているんですから大丈夫です」

「牛が好きで、牛と一緒なら頑張れます」

と二人はにこやかに語りながら、牛舎にやってきた牛を一頭一頭やさしく導いてつなぎ、熱いタオルで乳房をふいていく。

別の牛舎や草原から牛を追い込んでくるのはご主人の仕事。牛たちは搾乳棟の前でじっとおとなしく並んで順番を待ち、搾乳が終わると掃除された牛舎へ戻り、エサを食べる。

二人の研修生の働きぶりもすっかり板についているが、奥さんの慶子さんのスピーディにムダなく各所に気配りしながら動きまわる姿には感心した。

太田牧場は成牛100頭、仔牛50頭以上いる大規模酪農家。子供4人もよく手伝うというが、何といっても奥さんのパワーが大きな支えになっていると思う。研修生たちもそのことを実感しているに違いない。

研修生は食費・管理費として月35000円納めるが、農家が研修手当てを一日3000円支払ってくれるので、実質的にはタダ、小遣い位はできる。

太田さんは研修生について「みんな本当に頑張ってくれて、我々も大助りしています。いま農家にもこのような若い女性は減っていますので、ぜひ新得に残ってほしいと願っています」

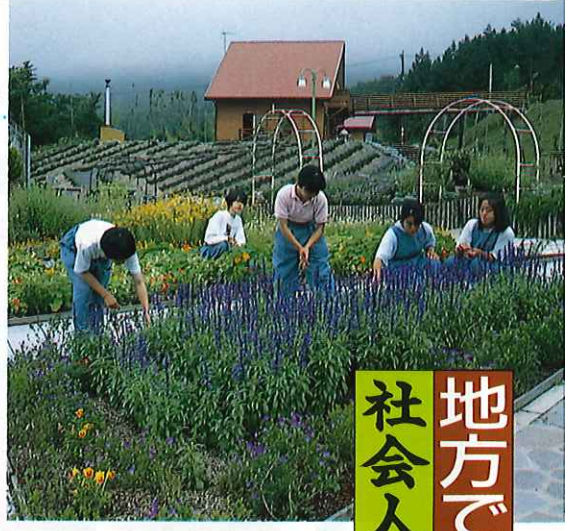
なお一期生は3月で研修を終了して、レディース・ファーム・スクールを出ることになるが、今後も研修を続けたい、新得の町に残りたいという女性が半数おり、その場合は町営住宅の独身寮を斡旋したり、住込みで研修できる農家を紹介することになっている。

4月からはじまる二期生については、よくマスコミ等に取り上げられたこともあって反響は大きく、約200件の問い合わせがあり、49人の申し込みがあった。

●問い合わせ/新得町役場農林課農政係☎01566(4)5111

太田さんご夫婦と。左が奥さんの慶子さん。

地方で「技術」を身につける!!
社会人・学生のための山村留学



▶ハーブの里で働く女性たち

緑の牧場で農家、畜産を体験してみませんか
㈳葛巻町畜産開発公社（岩手県）

㈳葛巻町畜産開発公社は広域農業開発事業として公共牧場の運営管理を目的に昭和51年に設立されたもので、土谷川牧場など約1100haに、牛、羊、放し飼いの鶏（岩手大型名古屋種）、フランス鴨を飼育、他にシイタケ栽培、マツタケ増殖、畜産加工事業、レストラン経営などに取り組んでいる。

自然や動物にふれながら酪農やシイタケ栽培を体験してもらおうと、早くから小中学生の学習旅行や日帰り研修を行ってきているが、社会人や学生を対象にして長期宿泊研修（一年以上で毎年8名）、短期宿泊研修がある。研修には農業、畜産専門コースがあり、宿泊は原則として葛巻町山地酪農研修センター（一泊2食4500円から）で。同社で研修を終えて、ここで働く若者も多い。研修は、何時でも誰でも何日間でもOK。現在6人が長期研修中。

☎0195(66)0211

農業経営をめざす人に
「大野台グリーンファーム」（秋田県合川町）

全国6位の農地を持つ秋田県では、「集まれ、アグリアドベンチャー」として21世紀型農業をめざす人を対象に研修、実習に力を入れている。

場所は秋田県が21世紀のテクノポリスとして開発をすすめている一角にある「秋田県農業担い手研修教育センター」と「大野台グリーンファーム」。

平成4年に県立営農大学校だった建物を活用して開校。ここで農業学の基礎応用を学習すると共に、周辺農家が参画して経営するグリーンファームで実習してアグリエイター技術を習得する。

対象は、高校卒以上の学力を持つ18歳以上の若者で、一年目は農業の基礎的知識と技術をマスター、二年目は施設園芸、稲作、畜産など、自分のやりたい分野を専門的に学習する。研修生には月10万円の生活費が支給される。現在10名が研修または専攻コースで学んでいる。

農業で食べていくのは大変だが、ここでは最終的に企業的農業経営を学び、農業で食べていけることをめざし、終了後は受入れ市町村の世話もしてくれる。首都圏から脱サラして研修する人も多い。秋田県農業担い手研修教育センター☎0186(78)3244

女性の感性を生かして
ハーブの里「香木（こうき）の森公園」（島根県石見（いわみ）町）

ハーブ栽培やアレンジメント、公園での作業を通じて都会では味えない自然の中でゆったりした暮らしを体験しませんか、と石見町が平成3年にオープン。都市の女性たちに呼びかけたクリエイティブスタッフは、今年も人気を呼んで70余名が応募、6名が選出されて4月に来町する。

5haの公園内には240種、3500株のハーブが栽培され、ハーブガーデン、温室、レストラン、テニスコート、スタッフの宿舎「香賓館」などがある。

今まで24名を受け入れ、うち6名がその後も町内にとどまって就職または結婚し、町は活気を取り戻した。

最近は見学や、苗木やハーブ加工品を求めに訪れる人も多くなり観光名所にもなっている。問い合わせ／石見町役場

☎0855(95)1111

「設計のできる大工」を
㈶木材研究所・土佐人材養育センター（高知県土佐町）

木造建築の伝統工法に、新しい技術をプラスした建築技術者の養成を高知県㈶木材研究所・土佐人材養育センターが実施している。

土佐町の廃校跡地を利用して平成3年にスタートしたもので、本館棟、学習棟、宿泊棟、野外実習場等がある。地元の木（杉、檜）をふんだんに使ったおしゃれでぬくもりのある建物。

研修生は全国から応募、平成4～5年は各30名、6年は17名が入学した。

修業期間は一年間だが、二年以降も現場で働きながら高度技術を磨こうという人が多く、OBたちは〝若くて優秀な大工さん〟として人気を博し、首都圏の大型建設現場でも活躍している。

研修生には個室の宿舎があり、月11万円が支給される。（うち食費に2万円）

午前中は建築概論から施工、法規などの学科、午後は設計・製図、実技演習がぎっしり。数々の教科をマスターし〝設計のできる大工〟（2級建築士）を養成する。

☎0887(82)2008

▼上／大野台グリーンファーム

▶土佐人材養育センターで大工実習

農作業を通じて自然と共生しよう

「まほろばの里」で学生がフィールドワーク（山形県高畠町）

▲古い民家を改修した和田地区の民俗資料館（宿泊地）

自然と向きあい、生命の囁きに耳を傾けてきた俺たちの声を聞かせよう。体験しよう炎天下の農作業！満喫しよう豊かな農家の暮らし――。

「まほろばの里」「有機農業の里」として全国から熱いまなざしが注がれている山形県高畠町和田地区には、毎年夏から秋にかけて、各地から多くの若者たちがやってくる。

上和田有機米生産組合農家と立教大学学生のフィールドワークは昨年8回目を迎え、22名が一週間農業体験をし、農家の人々との交流を深めた。

若者や農業に感心を持つ一般人が全国からやってくる「たかはた共生塾」は、炎天下で一週間農作業を体験、〝自然との共生〟を学習した。

これらの農業体験や農家との交流を通じて高畠ファンは増える一方で、「高畠で農業をやりたい」と移住してきた〝新・まほろば人〟は約50人にもなっている。

▶学生に説明する渡部常和さん（左）
◀ヒエ取り作業。井堂さん（左）は過疎問題を卒論に。

上和田農民に支えられて8年間

立教大学「農業体験in山形県高畠町」

立教大学学生部では、学生部セミナー「環境と生命」の一環として夏季フィールドワーク「農業体験in山形県高畠町」を昭和63年より実施している。

地球規模での環境破壊が進む中、地域ぐるみで有機農業に取り組み、農村のあり方や新しい農業を追い求めている高畠町に出かけ、「食」「農」の現場を体験し、農家の人々とふれあうことで、環境や命の大切さ、社会のありかた等を考えていこうというもの。

多数の参加希望者の中から学生部が選考した学生19名とスタッフ3名の合計22名（男性8名、女性14名）が、9月5日高畠町にやってきた。

受け入れ先は上和田有機米生産組合（受入れ実行委員長・渡部常和氏）、宿泊先は和田地

区民俗資料館。茅葺きの平屋建て民家で、約60畳の広さがあり、ここで自炊共同生活をしながら、朝8時から夕方5時まで農家へ出かけて農良作業を手伝う。

初日は、有機米農業推進の中心的役割を果し、自然との共生の大切さを説く農民詩人・星寛治さんの講演会で幕明け。翌日から3～4人が一つの班になって受入れ農家へ出かける。受入れ先やメンバーを毎日変えるので、その調整役をする渡部さんや学生部のスタッフは気を使う。

中に一日農家に民宿する日と、高畠町の町内見学をする日がある。

私たちが取材に出かけた日はあいにくの雨模様だが、農家にとっては恵みの雨で、残暑から解放された稲たちもまちもホッとくつろいでいるように見える。

最初に訪れたのは、受入れ実行委員会長渡部常和さんの家。米作の他にスイカ、ぶどうを作っており、ぶどうはデラウェアを終えて次の品種(ピオーネ)の出荷がはじまるところ。

3人の学生は、田んぼに入ってヒエ取り作業をする。化学肥料や除草剤を使わないのでヒエもはえてくる。それを時々取り除くための手間ひまは、安全でおいしいお米を作るためには仕方ないということを学生たちは学ぶ。

「有機質の肥えた土だから、土壌の持つパワーで米は病害虫にも強く立派に育ちます。数年前の大冷害では日本の米作は大半がダメになりましたが、ここは平年並みに収穫できました」

と渡部さんは学生たちに説明する。

高畠町の有機農業への取り組みはもう20年以上になる。化学肥料による地力の低下、農薬・除草剤の人体への影響を心配した農家の人たちが昭和48年に「高畠町有機農業研究会」を発足させ、消費者に産直するルートを開発して〝顔のみえる農産物〟づくりをめざした。

そんな中、高畠町でも水田の空中防除が行われるようになり、危機感を持った人々が昭和61年春に「上和田有機米生産組合」を結成した。加入農家は上和田地区専業農家のすべて、80戸。有機米作りの先進地であると共に、農業ひと筋の専業農家が多いことも特筆すべきことである。

学生たちへの昼食の準備で忙しいのに、奥さんが「私の車についていらっしゃい」と、次の受入れ農家へ案内してくれた。

二宮儀隆さんの家は米（1・8ha）と畜産(乳牛)。上和田には酪農家が10軒あり、堆肥は有機米作りに欠かせない。仔牛を入れて30頭おり、玄関を入った左手に牛舎がある。

ご両親が健在なので、義隆さんの奥さんは勤めに出ている。しかし今日は学生がくるというので休暇を取り、豪華な昼食を用意した。体験学習に来た学生は黒川さん(理学部4年)と岡田さん(法学部4年)。卒業後は一人は企業へ就職、一人はブラジルへ留学する予定だという。

農家へ嫁いだからと言って野良仕事や家事だけをするとは限らず、技術を持ち勤めに出る方法もあることが二人の女子大生には新鮮に映ったようだ。

午前は草刈りを手伝ったが雨で中止。牛舎に入ってみたが、牛の大きさにビックリ。仔牛にはさわれるが成牛相手には数日間の訓練が必要のようだ。

今井昭雄さんの家は長男の一紀さん（26）も農業を手伝う専業農家。お昼にはおばあさんがこの日のためにと特別に腕をふるったまつたけ御飯と天然まいたけのお吸物が出たそうで、三人の学生は大感激。

午前中はぶどう畑でビニールがけの作業を手伝ったが、午後は雨が本格化したため、のんびりお喋りすることにした。

今井さんの家のぶどう作りは本格的、大規模で、低温庫には間もなく出荷する完熟のデラウェアが保管され、裏手の畑ではピオーネ、ナイヤガラが間もなく収穫期を迎える。

有機質の土壌と低農薬で作られた完熟のぶどうは安全で大変おいしく、生協や消費者グループなどから引っぱりだこの人気である。

▶二宮儀隆さんの家で。あいにくの雨なので奥さん(中央)も加わってティータイム。そのあと牛舎へ行って牛の世話を体験する。

奥さんがぶどうとカボチャを土産にくれた。これほどホクホクしておいしいカボチャは近頃食べたことがない。

岡本君（経済学部4年）は、「農家の人がとても暖かくてやさしくて大感激です」。藤原さん（文学部3年）は「私たちは何も知らずに食物の安全性とか有機栽培と気安く言っているが、農家の人たちの努力は大変なもの。これからは食物にもっと関心を持ちます」

〝新まほろば人〟のOBたち——

夕食のあと8時をすぎた頃、立教大学を卒業して高畠町に在住するOBたちが和田民俗資料館に出かけてきた。フィールドワークに参加した学生たちにとって、先輩たちの体験談は大変興味深い。円陣を組んでじっと耳を傾ける。

足立陽子さんは社会人入学で立教を卒業したあと、憧れの高畠町にやってきて現在役場に勤務。「この町はみんなが夢を語り明るくて解放的。健康福祉係の仕事をしており、食と健康、高齢問題などをやっています」

手塚利雄さんは立教大の第一回目のフィールドワークから毎回参加し、卒業と同時に高畠町へ移住してきた。「自分の食物は自分で作ることが夢ですが、現在は町づくりに関する研究会等に参加したり農家へ手伝いにいき、10年計画で本格的な百姓になるつもりです」

社会人入学なので卒業したのが50歳の時。「土地がない、金がない、家族がない身ですが皆んなに支えられて楽しく暮らしています」

渡部圭子さんは2児の母。高畠町の農業青年にひとめぼれし2年間交際の末結婚。以来

▲今井昭雄さんのぶどう畑で。巨木の木が枝をはりめぐらす畑にビックリ。有機質の土壌づくりに力を入れていることに納得。
▶おばあさんがこの日のためにマツタケご飯を用意してくれた。

渡部夫妻はフィールドワーク行事にも世話役として貢献してくれている。圭子さんは教員資格があるので、近くの女子高校への講師に出かけるなど多忙な日々だが、何しろ毎日がとても幸せで楽しいと語る。

もう一人、菊地組合長の一人娘の家にムコ養子として入り、いまでは農業の大ベテランになった卓大さんがいるが、その夜は風邪のため出席できず、美人の奥さんが姿を見せていた。

農民の心を都市の人に

一般市民を対象にした「たかはた共生塾」（塾長鈴木久蔵）は平成2年に自主的な組織として誕生。塾生は現在約100人で農業、公務員、主婦など幅広い構成。年5回前後の常設講座と夏の「まほろばの里学校」を開催。「都会の人に新鮮な野菜や米ばかりでなく、心の糧をおくりたい。農民が講座を持って講義するのはここだけの特色でしょう」と河原事務局長（高校教師）は語り、参加者の共感を得ている。

和田地区には早稲田大学の大塚教授も「屋代村塾」を開設、農業実習を行っている他、東京でも「百姓応援団大会」等を開いて、都市の人に「農と食」の大切さを呼びかけている。

また、高畠町には、和田地区農家の有機農産物等を都市の消費者に直販する「米沢郷牧場」（伊藤幸吉社長）の存在も見逃せない。生産から流通、技術開発までをいち早く手がけ、東北一円の農家と生協会員の交流にも力を入れている。

（写真／小林恵　文／浅井登美子）

▲〝新まほろば人〟のOBを囲んで。左から手塚さん、足立さん、渡部さんと子供たち、菊地組合長の娘さん。
▶夕食の前に学生部スタッフから明日のスケジュールの説明がある。夕食は当番制。農家から野菜や果物の差し入れも多い。

全国の山村留学事業実施市町村

●寮主体　○里親主体式　★家族留学も実施　☆家族留学のみ実施
指定のないものは里親、寮の併用式

形態	市町村名	受け入れ学校	開始	問い合わせ先
★	北海道鹿追町	瓜幕小・瓜幕中	平2	01566-7-2323
	〃　上士幌町	北門小	平7	01564-2-3354
	〃　中頓別町	小頓別小・小頓別中	平4	01634-7-8030
★	〃　浜頓別町	豊寒別小	平7	01634-2-2525
★	〃　天塩町	幌萌、円山、北生士小	平4	01632-2-1001
★	〃　音威子府村	咲来小	平3	01656-5-3356
☆	〃　中川町	佐久小・佐久中	平7	01656-8-5331
	〃　白滝村	支湧別小	平4	01584-8-2963
★	〃　美深町	仁宇布小・仁宇布中	平3	01656-2-3917
★	〃　置戸町	勝山小	平4	0157-54-2320
☆	〃　新十津川町	吉野小	平元	0125-73-2009
★	〃　津別町	相生小	平8	01527-8-2407
★	〃　日高町	千栄小・千栄中	昭62	01457-6-2668
○	〃　今金町	美利河小	平2	01378-3-7403
★	〃　広尾町	音調津小・音調津中	平3	01558-2-5204
★	〃　東神楽町	志比内小	平5	0166-96-2146
☆	〃　新得町	富村牛小	平7	01566-5-3064
★	〃　上士幌町	東居辺小	平7	01564-2-4467
★	〃　斜里町	峰浜小・三井小・来運小	平6	01522-3-3131
	秋田県合川町	合川南小・合川中	平5	0186-78-2117
○	山形県大江町	七軒西小	昭62	0237-62-2111
○	〃　川西町	東沢小	平4	0238-48-2012
●	福島県鹿島町	上真野小・鹿島中	昭60	0244-47-2457
●	〃　鮫川村	鮫川小・鮫川中	昭63	0247-49-3344
●	新潟県羽茂町	小村小・羽茂中	昭61	0259-88-2230
	〃　松之山町	浦田小・松之山中	昭60	0422-56-0151
●	群馬県上野村	上野小・上野中	平4	0274-59-2137
●	山梨県芦安村	芦安小・芦安中	平6	0552-88-2144
☆	〃　丹波山村	丹波小・丹波中	平4	0428-88-0211
☆	〃　芦川村	芦川・中	平8	0552-98-2711
	長野県八坂村	八坂小・八坂中	昭51	0422-56-0151
	〃　北相木村	北相木小	昭62	0422-56-0151
	〃　売木村	売木小・売木中	昭58	0422-56-0151
	〃　美麻村	美麻小・美麻中	平4	0422-56-0151
●	〃　浪合村	浪合小・中	昭58	0265-47-2001
●	〃　泰阜村	泰阜南小・泰阜中	昭61	0260-25-2851
●	〃　小谷村	中土小・小谷中	昭60	0261-82-2001
○	〃　平谷村	平谷小・平谷中	昭55	0265-48-2211
★	〃　松川町	松川東小	平4	0265-36-2303
★	岐阜県八百津町	潮見小	平5	0574-42-1001
○	富山県利賀村	利賀小	平元	0763-68-2111
	石川県小松市	西尾小	平3	0761-41-1231
●	〃　白峰村	白峰小	平元	07619-8-2452
●	奈良県下北山村	下北山小	昭63	07468-6-0901
★	〃　東吉野村	高見小	昭62	07464-4-0304
☆	〃　御杖村	菅野小	昭63	07459-5-2516
●	和歌山県粉河町	鞆渕小・鞆渕中	昭63	0736-79-0003
	〃　かつらぎ町	新城小（里親方式も）	昭57	0736-26-0351
★	〃　清水町	五郷小	昭63	0737-22-0352
☆	〃　本宮町	請川小	平6	07354-2-0028
★	三重県藤原町	立田小	昭63	0594-46-2058
★	〃　飯南町	有間野小	平5	0598-32-2380
☆	滋賀県大津市	葛川小・葛川中	平元	0775-99-2154
☆	大阪府千早赤阪村	多聞小	昭61	0721-74-0102
○	兵庫県神崎町	越知谷第二小	平4	0790-33-0013
○	〃　波賀町	道谷小	昭58	0790-73-0432
○	鳥取県日南町	大宮・山上・阿毘縁小	昭60	0859-82-1111
○	岡山県阿波村	阿波小	昭63	0868-46-2251
○	〃　富村	富村小	平2	0867-57-2022
○	島根県石見町	日和小	平4	08559-7-0908
○	山口県周東町	周北小、中田小	平5	0827-84-1115
●	〃　本郷村	本郷小	昭62	0827-75-2056
●	愛媛県広田村	高市小	平4	0899-69-2114
○	〃　中島町	野忽那小	昭62	0899-98-0330
○	〃　久万町	二名小	平6	0892-21-8236
	高知県大川村	川口、船戸小・大川中	平元	0877-84-2211
●	〃　池川町	池川小・池川中	平5	0889-34-2110
	〃　大野見村	北小	平3	0889-57-2129
	〃　葉山村	白石小	平8	0889-55-2346
○	徳島県木頭村	北川小	平2	08846-9-2200
★	福岡県添田町	津野小	平4	0947-84-2005
○	〃　星野村	仁田原小	平2	0943-52-2511
○	佐賀県富士町	北山東部小	平6	0952-57-2441
○	大分県前津江村	赤石小	平2	0973-53-2111
	熊本県産山村	産山北部小	平元	0967-25-2251
○	〃　高森町	草部南小	平3	0967-64-0343
●	〃　菊鹿町	内田小	昭61	0968-48-9575
○	宮崎県西都市	銀上小・銀鏡中	平7	0983-46-2450
★	鹿児島県霧島町	永水小	平4	0995-57-0367
○	〃　市来町	川上小	平6	0996-36-2044
○	〃　喜入町	一倉小	平6	0993-45-0451
○	〃　十島村	平島小、中他5小中	平4	0992-22-2101
○	〃　大和村	戸円小・戸円中	平7	0997-58-3069
○	〃　天城町	西阿木名小三京分校	平8	0997-85-9002
○	〃　南種子町	茎南小、長谷小	平8	09972-6-1111
○	〃　鹿島村	鹿島小・中	平8	09969-4-2524

（平成8年3月現在／㈶育てる会調べ）

お知らせ

過疎地域活性化ビデオ第4弾（VHSカラー30分）「ふるさと見つけた」（仮題）

間もなく完成!!

福島県・新潟県の只見川流域、和歌山県、奈良県、三重県の熊野川流域の町村のアイデアを活用した滞在型観光地づくりを紹介します。

CATV放映もしますので是非ごらんください。

編集室から

農家に育ちながらカマもクワも持ったことのない子供が増え、当然のように都市へ出ていく風潮の中で、山村留学する子供の存在は、自然や大地にふれあうことの素晴しさ、お年寄り等との交流の大切さを教えてくれる。（A）

De POLA［でぽら］
NO.12（'97春夏号）
発行日／平成9年3月15日
発行所／全国過疎地域活性化連盟
〒160 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階
☎03-3580-3070
編集協力・印刷／㈱ぎょうせい
協力／地域活性化センター、編集工房アド・エー

でぽら No.12
平成9年3月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟 〒105東京都港区虎の門1-1-24 オカモトヤビル8階 ☎03(3580)3070代

宝くじの収益金は、公共事業に役立っています。

宝くじ色・いろいろ。

「当たったらどうしよう」のときめき。縁起かつぎや夢の予感。毎回、生まれるロマンやドラマ。年々ビッグになる賞金、バラエティに富むくじの種類。「ガッカリ」のハズレ券にも、9月2日のラストチャンス。さらに、収益金はあなたの身近でいろんな形となってお役に立っています。皆さまに愛されて、宝くじは表情多彩。

（本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです。）

宝くじ
財団法人 日本宝くじ協会